

迄罷越す第二時御出帆第四時頃海安地方を認る夜ふ入りて船少し搖動せ
て今朝御國に出狀之便ありとも差向たる御用のなけきを略しぬ

正月廿三日晴 北緯十八度四十一度
東徑百八十五度五十一度
寒暖計七十五度 速二百七十八里 柴棍迄六百三十七里 二月二十七日

昨日迄の寒暖は大概御國ふひとしけきは度敷を記することを略す

濤路の追々熱帯ふ進免るふと暑氣増して御國四五月の候と覺ゆ洋中は
風冷ふてさまたふ難堪を覺えす此日は順風=眞帆打挂舟行如意四方ふ認
むる地方もなく甲板上の眺渺逸たり昨日香港を發せしと今日第十二時
迄二百七十八里を航し是と柴棍迄尙六百三十里余ありといふ

正月廿四日晴 北緯十三度五十五度
東徑百七十七度二十五度
寒暖計七十六度 速三百里 柴棍迄三百三十七里 二月廿八日

昨夜と暑氣稍増して航海の南移せしを覺ゆ風波は殊ふ穏ふ時々安南
の小島を見る第十一時遙ふ帆前船の映行るを見る

正月廿五日晴

三月一日

朝より次第ふ地方近く第十二時瀾滄江の入口なる燈明臺山の麓ふいふ

此邊を望水先案内之者本船に乘組て川口に入りぬ上流ふ廻ること凡六拾
里計ニ亦川幅も漸狭く或ハ曲折せし處ふては船を戻して揖を換へ兩岸と
も切迫をせとも水深しと見へて舟行隙りなく岸は椰子又は榛の木様の雜
木叢茂して綠葉繁鬱せり夕六時柴棍の碇泊所ふ到る日暮たきを御上陸は
なし本地は安南地ふて四五年前と佛國の分取せし土地なりといふ夜ふ
入鎮臺の名代として使節の者本船に罷越明日御上陸の時刻馬車御迎の手
筈等申聞る此夜は風冷しく氣候秋の如く兩岸とも滿緑の草木種々の蟲聲
の澄々ありて聽えけきを殊更ふ幽情を催す

正月廿六日晴 北緯十度七度
東徑百七十七度
寒暖計八十三度 三月二日

朝七時御迎船來りけきを公子は直様御上陸御供は隼人正石見守其他扈從
の向陪從せり御上陸の節軍艦ニ二十一發の祝砲を發す騎兵半小隊程ニ
亦馬車の前後を警衛申上る本地鎮台を御尋問のところ茶を奉り武樂を奏
す且本國博覽會ふ傲へしと様々の樹木禽獸杯取集めたりしを御一覽夫

市街御遊覽第十時御歸船暮五時とて尙又鎮臺とて御招請申上けし人正石見守其他御扈從向御供ニ被爲入種々御饗應當地在留の諸士官相つとへ音樂を奏し御旅況を慰む夜十時御歸船

正月廿七日晴 寒暖計八十七度

三月三日

本船は飛船なまは朝とて旅客の乗込ぬる事いと多く中不婦人小兒杯も見へ又荷物を多く積ならる甚鬱陶を覺ふ晝十時御發船瀾滄江を下り四時頃川口なる燈明臺山の麓に到る先不乗組し水先案内は是とて歸る追々大洋不舛航を片帆なまとも風追手なまの舟脚早く甲板上も風故不暑氣稍凌よし

正月廿八日晴 北緯六度二十一分 東經百三度五十一分

速二百四十七里 新嘉坡迄三百四十一里

三月四日

風前日不同じく片帆眞切ニ舟行尤疾し晚餐不御國白瓜様の菓を饗を酸を加へて食を味ひ美なり

正月廿九日晴

北緯一度四十五分 東經百二度三十三分

速二百九十一里 新嘉坡迄五百五十二里

三月五日

朝島嶼二ツを右の方ニ見る午後次第不地方近く第二時頃新嘉埠港なる燈明臺を行過る此燈台は海中に突出せし岩に臺を設けしなまは然も壯嚴なり先年荷關船云ふ夕六時頃新嘉埠着御碇泊間もなく佛國コンシユルセテラール本船不來りて御機嫌を伺且明日當地御遊覽の手續を申聞る夜不入り石炭を積入るとて盡く船窓を鎖しぬまは夜熱殊ニ其酷しきを覺ゆ

二月朔晴 寒暖計八十三度

三月六日

朝六時御上陸當港は海岸迄水底の深けまは港口へ浮波塘を拵置船を挂たまは小船もて上陸する煩ひなし御供は隼人正石見守其外御扈從向ニ先佛のコンシユール所不御訊問夫不花園御遊覽る本港ハ他港と異なりて港口不街衢迄一里余もるぬまは馬車往還の眺望異俗田園の風情いと興を添ふ土人は四時とも衣服を用へま只紅なる布ニ頭上と腰とを纏ふ面色極て黒し港口碇泊之邊に村童の多くつとへ來て瓜皮の如き小舟を浮めて旅客の投錢を乞ふたまは錢を投まぬ水底へ沈没してこれを拾ふ其

さま恰蛙の游泳する如し其興を慰む夕五時頃發汀順風ふ帆を捲揚ぬ
此日佛國コンシユールセテラール爲御見送夫妻同行ニ本船へ罷出る
御國の第二號御用狀差出ま

二月二日晴 北緯二度 東徑九十八度四十二度 錫蘭迄 速百九十九里
寒暖計八十六度

三月七日

風故暑氣は少しく凌易きを覺ゆ朝右手ふ麻刺加地方を見る昨日も旅客の
増加しぬをい甲板上いと混雜せり

二月三日晴 北緯五度三十二度 東徑九十五度十四度 錫迄 速二百六十里
寒暖計八十七度

三月八日

美晴軟風ニ舟行は快けきとも暑氣ハ甚酷し第十一時左の方ふ小島を見
る帆前船の遙み舳行をを見る

二月四日晴 北緯五度五十四度 東徑九十度十五度 錫迄 速三百里
寒暖計八十五度

三月九日

天氣朗晴輕風ニ聊苦熱を忘る風波も穩なきをいとして本日とて公子并御附
添とも佛語御稽古を初む

公子は一行の留學生保科俊太郎御相手申上御附添ハ山内文次郎を受る

へとて朝夕兩度の日課を定む

二月五日晴 北緯七度〇七度 東徑八十五度五十八度 錫迄 速二百四十八里
寒暖計八十五度

三月十日

昨夜蒸氣器械の損せしとして夜三字頃舳行をとむ曉五時頃修理せしと
て發しぬ其爲ふ五六十里の航路を費せりといふ

二月六日晴 北緯六度十六度 東徑八十二度三十一度 錫迄 速二百七十里
寒暖計八十二度

三月十一日

今曉第四時頃尙又機關の損せしと見へて舳行を止む第九時頃ふぬり
ひ修繕まさをとも順風なをい修覆中帆前ニ一字間三四里程を進む

二月七日晴 寒暖計八十七度

三月十二日

朝七時錫蘭島の内ホエントデガール御着朝食畢りて十一時頃御上陸ヲリ
エンタルホテルといふ客舎に御投館暫時御休息御一時頃英國が在勤せる
ゴラフルニウエイシコン并陸軍士官とも來りて謁を乞ひ御安着を祝ま且
馬車を備へ市中御遊覽を申上る午餐後市街御遊覽第七時夜飯お見りて御
歸船此地釋伽涅槃の舊寺院ありしる公子は御間隙なけきは御越なく一行

之内ニ相越せし者もほせといと寂寥たるさまみて別ニ記をるきことなし

此地土人は大概新嘉埠同種ニ風俗も稍同し蝟毛鼈甲の細工物多く産ま地形三面とも海を帯て海岸ニハ處々礮臺あり往昔は阿蘭領なりしを千八百年頃英國ニ侵掠せらせしといふ

二月八日晴 寒暖計八十四度

三月十三日

朝十字ボエントデゴール御出帆昨日と暑氣彌増して一同堪兼ぬ且旅客追々乗組を甲板上も混雜して甚た鬧隘の想を爲す第一字頃洋中ニ鮫魚の多く躍り出るを見る夕三時頃驟雨來る又一抹の點雲空中ニありし氣の蒸熱せしと見へて潮を捲上ること恰も陸地の蕪風みひとしくおきな所謂龍卷なりとて人々奇觀の想をなす

暫して雨歇て天氣朗晴なり

二月九日 北七度十度 東七十三度廿九度 寒暖八十四度 亞迄二百六十七里 千八百六十八里

三月十四日

昨日の雨故に暑氣少し減して凌とし

二月十日晴 北八度〇四度 東六十九度十八度 寒同斷 亞迄二百五十七里 千六百一十一里

三月十五日

朝海馬の波間ニ浮出せるを見る暑昨日と同じ

二月十一日晴 北九度〇四度 東六十四度四十五度 寒同斷 亞迄二百七十五里 千三百三十六里

三月十六日

午餐ニ西瓜を食す味甚淡泊なり

二月十二日晴 北緯十度十五度 東六十度〇六度 寒同斷 亞迄二百八十四里 千〇五十六里

三月十七日

暑氣昨日と同じ

二月十三日晴 北五十一度三度 東七十八度 寒同斷 亞迄二百八十二里 七百七十四里

三月十八日

夕方と風歇て暑氣酷し

二月十四日晴 北五十一度四十一度 東八十一度 寒同斷 亞迄二百八十八里 四百八十六里

三月十九日

午前々亞刺比亞地方ニある島々を見る夕方帆前船の舳行るを見る

二月十五日晴 北十二度二十九度 東八十二度五十二度 寒同斷 亞迄二百九十里 百九十六里

三月廿日

風涼なく暑氣尤酷烈なり夕方より紅海ニ入ると見へて時々島嶼を見る

午後鯨魚の洋中へ浮ふを見る

二月十六日曇 寒暖計八十四度

三月廿一日

朝第六時亞丁御着直ニ御上陸馬車ニ御遊覽當地は總て焼山ニ絶る草木なし水至る乏しく雨は兩三年間一壹度位降るといふ土人は色極て黒く髪毛焼爛して恰も夜叉のおとし驢馬駱駝の類を多く産む市街は海邊と一壹里程も隔ると覺ゆ陌頭と見へし處に大なる城門あり山に倚て要害嚴重なり此日十時頃雨少しく降りけとも乾燥の土地なまは更に濕はま十一字頃御歸船夕第三時發汀せよ此日御國に第三號の御用狀差出せ

二月十七日晴 北十五度五 東三十九度五十一 寒暖八十一度 速二百六十六里 蘇士迄千四十二里

三月廿二日

朝亞弗利加州北邊の島を西へ見る順風なまとも烈しけまば船頗る動搖せ

二月十八日晴 北十八度五十八 東卅七度〇四 暖八十三度 速二百八十四里 蘇士迄七百五十八里

三月廿三日

暑氣稍減し聊苦熱を免る

二月十九日晴 北二十二度五十八 東卅四度五十五 暖八十一度 速二百六十八里 蘇士迄四百九十里

三月廿四日

朝々西風烈しく船動搖せり九時頃を逆風彌吹募り怒濤甲板上下打揚る程なまは散歩の人もいと稀なり夕方より漸靜まる伊太里蒸氣船の蘇士へ來りしを見る

二月廿日晴 北廿六度卅二 東卅二度四十七 暖七十八度 速二百五十里 蘇士迄二百四十里

三月廿五日

昨日と追々暑氣を減む夕佛國の軍艦航行を見る左へ亞弗利加地方右へ亞刺比亞地方を見る風順にして船行靜なり

二月廿一日晴 暖計七十八度

三月廿六日

順風ニ舟行疾し海灣の追々隘まると見へて漸雨沿の山を見る十二字頃蘇士着川蒸氣船御乗替御着岸御上陸同所客舎へ御休息御上陸ニ節佛國ニシユール警衛のもの差出し御出迎申上る夕餐後第七時蒸氣車御乗組第八時御發軔同夜第一時核祿埃及都府へいゝり暫時御休息直へ發軔 當地は

各種々奇古の品有之地なるよしなまとも夜中なまは御遊覽はなし

二月廿二日晴 寒暖計七十七度

三月廿七日

今朝第十一時亞拉散大御着蒸氣車會所馬車御召替同所客舎に御休息
無程佛のコンシユールセテラル罷出御安着を伺御招請之儀申上る且居
宅手廣ふ付御止宿之儀申上準人正石見守保科俊太郎御扈從向御供ニる夕
二時頃とて馬車ふて市中御遊覽夫々同所に御越此夕コンシユール其外士
官罷出御饗應申上る當港は埃及國の別都ニる地中海とて西洋渡海の湊な
る舟船輻湊して市街も頗る繁華なり昨夜を暑氣次第に減して
御國四月頃の氣候と覺ゆ

二月廿三日曇 寒暖計七十度

三月廿八日

地中海の飛脚船今朝十一時出帆之筈ニ付公子は昨夜御止宿の佛館を直ニ
御乗船の積なをは一同役々も十時頃とて荷物等取纏ひ同船に乘組ぬ無程
佛國コンシユール警衛の者差出しバツテラニる御送申上第一時御乗組
五時頃出帆此日空曇り風強く時々は雨を交へ船搖動せり御乗組ありしは
サイドといふ飛脚船なり

二月廿四日晴

三月廿九日

風北ふて航行逆なをとも船動搖せま終日山を見ま

二月廿五日晴

三月三十日

風静ふ船穩ふして航行安寧なり

二月廿六日晴

三月三十一日

朝とて風強く船少しく搖動せり夕六時伊太里地なるメンイーナ港着此地
とて初る西洋の地なりといふ夜ふ入たをの御上陸はなし第二時を同所御
出帆風弱しく船搖動せり

二月廿七日晴

四月一日

朝とて逆風ニる船甚しく動搖せり海疾ふて食事ふ附く人いと少し

二月廿八日晴

四月二日

船の搖動昨日と同じく第九時頃コルシカ島サルジニ島の海狭を航ま
いつれも佛國の屬地なりコルシカ島は佛國初代の那波烈翁誕生せし地なり

といふ此日風濤甚しく終夜船の動搖やます

二月廿九日曇

四月三日

曉より西北風となりて船の動彌増して甚し第九時半佛國馬塞里港御着船
海岸ニ有二十一發の祝砲あり暫くして御國コンシユールセテラールフロ
リヘラルト并御國士官の佛國不到着し有る鹽島淺吉北村元四郎兩人御出
迎として罷出る無程本地コンシユールセテラール御迎不罷越しバツター
ラニ有御上陸御警衛は騎兵一小隊斗にて前後御守衛同所なるヲテルデマ
ルセールに御投館此日同所鎮臺并海軍惣督陸軍惣督市尹等禮服ニ有替る
替る御機嫌を伺ふ第三時馬車ニ有フロリヘラルトジュリー御案内申上鎮
台并陸軍惣督を御尋夫を當所なる佛帝別宮其他市街を御遊覽第六時御歸
館第八時を演劇御遊覽ニ有第十一時御歸館

二月晦日晴

四月四日

朝海軍惣督并コンシユールセテラール御尋問夕刻を鎮台御招待ニ付隼人正

石見守保科俊太郎御小性四人御供ニ有御越鎮台并附屬士官等打寄御饗應
申上る夜田邊太一木村宗三高松凌雲山内文次郎等爲御迎罷越第十一時頃
御歸館

三月朔晴

四月五日

朝御寫眞被爲取夫を本地之華園御越奇禽怪獸御一覽第二時御歸館
此日爲御迎罷出しフロリヘラルト其他御國士官兩人とも巴里へ罷歸る尤
當地御滞留ハ本月三日迄の積ニ付四日リヨン御一泊ニ有五日巴里御着之
積申遣ま

三月二日晴

四月六日

今朝當地を三十里余東南なるツロンといふ所ニ有軍艦貯所其外諸器械等
御一覽のた免朝第七時御發ニ有御供向ハ隼人正石見守保科俊太郎箕作貞
一郎澁澤篤太夫御小性貳人ニ有御旅館を馬車ニ有蒸氣車會所御越夫を蒸
氣車ニ有九時半頃ツロン御着

此日美晴ニ有車中四顧の眺望十分の春色いと興を添ふ田野には麥稔種其外名のまま草木の多くありし

方總あり花兼あり手筈のほゞけをのッロンなる鎮台夫々の役筋ニ御出迎申
 上歩兵半大隊斗御道固にふし御着の節ハ奏樂して祝詞を呈せ無程小さき
 川蒸氣ニ港に碇泊せる軍艦の御案内申上大砲其外蒸氣の機關等御覽終
 り不打砲調練をせし又御慰ふとていと大なる炮火火藥を點して公子親ら
 御發砲夫々他船三艘程御歴覽右御越りし船毎に十七發の祝砲を發せ第十二時鎮台の役所に御
 誘引午餐を御饗應此日御誘引に與りし士官美麗の装に御相伴いふ御饗應後尙又馬車ニ御製鐵所御
 越鎔鑛爐反射爐其外種々器械御一覽又銃砲の圍所御覽終りニ人を水底に
 沈ましむるの伎を試ましむおは緻密なるゴムニ衣服を拵手足四支水の
 とふらぬ様ふにふし置頭ふの眞銅ニ丸く頭成ふ鑄立たる兜を着耳口の
 邊はギヤマンニ張り視聽自由ならしむ頭上ふゴムの管をとふして空氣
 を通せしむ此日沈没せしは水底も淺しとて凡四五ミニニト程なり夕五時半頃先の
 役所に御返事果ぬを暇を告元の蒸氣車會所に御越ニ直様發朝夕七時
 御歸館此日御行になりぬる紅縮緬壹正に時繪の食籠壹器を當地
の惣奉行の同縮緬壹正時繪の香合壹ツを水師提督に被下

三月三日晴

四月七日

朝第十一時より本地なる調兵場ニ三兵調練を御覽此日の調兵ハ歩兵三レジ
坐程なり尤行進而此調練は去歲東甫塞ニ戰爭之節有功之者にメダイルと
已ニ運動はなしいふ功牌を與ふ爲なりといふり右恩賞の式三兵を四方に布列ね中央にて
 稠人廣坐の觀望の屬する處に當人を立しめ惣督并軍監何をも馬より下り
 て恩賞を申渡し惣督手柄メダイルを襟に付け挨拶して式終る第一時頃御
 歸館

三月四日晴

四月八日

朝十時頃公子をはしめ御附添一同寫眞を被爲取夫々學校御一覽精舎所ニ
 る種々精舎を試み又顯微鏡ニ細蟲を寫し御覽入る學校寄宿所會食所部屋
寄宿の者凡五百人あり修行料衣食料一切の費一歳九百佛なりといふ

三月五日晴

四月九日

此日は終日御在館御休息尤隼人正并支配向とも本地コンシユールセテラ
ール役所に罷越一昨三日船中祝砲の數相違せしを掛合ひ多き事果さむは
巴里御着之上相談可及旨ニ引取此夜當地鎮台陸軍惣督コンシユールセ
テラール其外附役拾貳人を御招ニ夜餐被下隼人正石見守支配向拾貳人
相伴のた先同盤不列る夜十時一同退散ひまむ

三月六日晴

四月十日

朝十一時御發蒸氣車會所ニ蒸氣車御乗組鎮台并コンシユール其外とも爲御送罷越夕七時リ
ヨシ御着ホテルデヨローロツバ御投宿

三月七日晴

四月十一日

朝七時蒸氣車御乗組直ニ發朝夕六時半巴里御着ガランドホテル御投宿此
日巴里蒸氣車會所迄御國ミニストル書記官カシヨシ其外とも爲御迎罷出
る尤フロリヘラルトハ要用有之旨ニ代々者差越ま

此夜爲御使魯西亞に罷越候小出大和守石川駿河守支配向とも同國御用濟
歸國の路次とて一昨夜當地着之趣ニ罷越を即刻御機嫌を伺へ魯國不
し事共申上る

三月八日晴

四月十二日

此間中取極置しふと朝第七時一同御用取扱候役所出席御機嫌を伺ひ
夫々昨日御着之儀を當地事務大臣に申達する書翰の手續を取調向後御滯
在の規則を定む夕六時御安着御祝として一同の御同案の夜餐被下尤小出
大和守石川駿河守支配向をも御招ニ同様被下

右は京都御出發と佛都御着日々し事共の概略を記せる而已ニ
爾後の日録は旅行と異なるを公務の條緒を摘書し置て別不輯抄せんと
欲ま

卯三月廿一日校

慶應三年丁卯八月我 民部大輔殿兼

大君殿下の親命被爲在佛國博覽會之舉被爲濟し上は御條約濟同盟の各國御巡歴御訊問被爲遊ニ付既ニ其期ニ至りぬるとして法國ニ在留せる各國公使へも御巡國の手筈御談および御支度も相調ぬをば八月五日法國御出發瑞西國とシ荷蘭字漏生白耳義等御巡歴之積八月六日巴里御旅館御發と治定ぬ

八月六日晴極暑

九月三日

朝六時御旅館御發馬車ニ在當地なる汽車會所シメンデヘールレイストといふ會所ニ在蒸氣車御乗組七時發軔晝十一時シヤンバンユのトロワといふ處にて御晝食リシヤンバンユは法國の一部郡ニ在シヤンバン酒の名所なり本地の産に比しと數等なりし夕八時瑞西國パールといふ地御着トロワトロワといふ客舎に御投宿此日は酷暑にて車中炎熱難堪殆旅苦を覺ゆ剩夏日の長きを終日車中消したをば公子始一同疲勞いふを御投宿後ハ夕涼みて殊ニ客樓は本地

有名なるランヌといふ歐州第一の大河に臨せしむば欄頭の夜景いと清涼みて一同快然の想をなす御着後直ニ本地の鎮台客舎に來り御安着を祝す

九月四日

八月七日晴 熱昨日と同じ

朝八時半昨日の鎮台御案内申上本地說法所并織物細工所御遊覽十時頃御歸宿夫々御出發蒸氣車會所ニ在汽車御乗組晝一時半過國都ベルン御到着ベルネルホフといふ客舎御投宿御着後直ニ大統領の命なりとて壹人の書記官罷出大統領御逢の手續御問合申上る因て明日御逢之積申答遣を夜餐後御口上振其外手筈取調る此夜當地御安着の旨電信にて巴里に申遣す

各國御巡歴御供名面

向山隼人正

山高石見守

保科俊太郎

高松凌雲

田邊 太一
 箕作 貞一郎
 山内 文次郎
 澁澤 篤太夫
 菊池 平八郎
 井坂 泉太郎
 加治 權三郎
 三輪 端藏

外ニ兼テ御雇の通辯御用としてシトボルトをも被召連

都合拾三人

道中取扱方

キース

御旅館小遣

アンソ
網吉

単人正家來
石見守家來

壹人宛

都合一行貳拾人となりぬ

八月八日雨夕晴

九月五日

朝來雨甚しく殊に本地は山壑多けきは雲霧ニテ四望分ちぬし客樓は水濱ふて眺望不佳なきは雨中の風煙も更に興を添ふを覺ゆ此日は第十一時とゞ大統領御逢の手筈なきは御扈從之者早朝とゞ支度相整ひ十一時頃御迎馬車四輛當日諸事取扱として第一等書記官罷出御都合相伺直様御出向ニテ議事堂に御越議政堂は御旅館に隣りて此日御逢はしは大統領副統領其外重任之役々四人都合六人なり御着席後御口上振御演述山内文次郎佛文に譯し申述る大統領とゞも御答詞申上暫時御閑談ニテ御歸館此日御逢の手續は別に手續

書に委しく記し
たまは此に略す

夕五時公子隼人正石見守御供大統領の宅御尋問のところ不在なる御面會
なし隼人正田邊太一此日御逢りし役々の居室は爲挨拶罷越此夕大統領
十人御着御祝として御旅館の差出し奏
樂を呈す樂後一同のシャンパンを被下
園衢の人民御旅館の前庭に群集せり

八月九日晴 朝大霧

九月六日

此日はツンヌといふペルヌヌ十里餘隔る地ニ赤點火の調兵あるニ付御
覽の儀昨日大統領を申上ぬきは朝五時半とゞ御支度軍事惣督御案内御附
添一同御供ひて六時蒸氣車發軔七時半頃ツンヌ御着直ニ調兵場の御越
公子は御馬ニ被召石見守及爲通辯シーボルト御供其余は馬車ニ御供此
日調兵せし人数は歩兵四レジメンド壹レジメンド
七百八人程大砲貳座八門騎兵二中隊中
隊
三十撤兵貳中隊中隊
六十人なり整頓行軍の駆引を攻撃襲討の舉動迄其指揮綿
密にして然も着實なり此兵士は總て農兵ニ赤僅一月半の訓練なる如此熟

達せしといふ國內調兵之法總て農事を取りて農事を害せざる様其約束を緩
みし人々能其能を盡さしむるを政體の要領とせ故に即今舉國二百萬の兵
士あり其法簡易輕便よて整肅ならざる様なをとも他邦月督日課の兵に恥
まといふ調兵終て後本地客舎の御案内午餐御饗應申上る此日調兵に預りし
役々七八人罷出て
御相伴午飯後本地有名の豪富者居室御覽右居室はツンヌ湖の水
涯に瀕して建築せり樓上の眺望
尤絶佳なり湖水は周圍十里程もあるるく水清く波浪靜るに四圍蒼山鬱々
として黛を臨し翠を流ふ尤絶奇なるはヨングフロウといふ山いまた開墾せ
ざる處野女と
意積雪如銀雲際に突兀し連山の翠に相映し其貌却る白髮羽化の老僊多
少の群兒を擁坐せしことし瑞西は歐州中山河の光景に富みし地にして本
地は瑞西中の風色の尤なりといへは此風景をもて歐州第一といはんも亦
不可なるるをらま佳景御一覽後湖水流末の一小亭ニ御休息再び調兵場
御越大砲の丁打御覽夕五時汽車御乗組六時半御歸館

八月十日晴

九月七日

ゼチーブは湖水の西南に瀕して頗る繁華の土地なり湖水の末流街衢を中截して流決まる處ふいと廣大なる鐵橋を架し兩衢とも往來を自在ならしむ其側は小島あり樹木蒼茂して頗る遊歩に佳なり尤夏夕の納涼に宜しといふ閩衢殷富なる人品も卑しあらま所々廣大なる時斗の製造所あり其精巧緻密驚くをし瑞西人本地を稱して小巴里といふも其實なしと謂るあらま昨日伊太里國のゼチーラルガルバルジー本地へ罷越り本國の大統領も所用なる相越せしとて市中は尤雜沓を究めぬ

八月十二日晴

九月九日

晝十時一同御供申上時斗製造所御一覽夫々市中御遊覽十二時御歸館午餐後隼人正石見守田邊太一シーボルト御供なる昨日來會せし大統領の宿所御訊問本地の統領居宅へも御越及金細工所等御一覽なる御歸館此日本地の豪富バロンロウチーユルといふ者罷出て御機嫌を伺ひ御招請申上けは夕五時御越御土産として蒔繪の香合扇子五本を添て被下

昨夜ベルンと栗本安藝守馬寨里來着之旨電信なる申來る明十三日ベルン御歸館可相成旨同様申遣也

八月十三日朝雨夕晴

九月十日

御見物も相濟ぬを今日ベルン御歸館の手筈なる朝六時蒸氣車發軔十一時半ヌーシヤテルといふ小市街御着本地ハ電信機の根本なる其器精妙なるとし且近來の新發明なる字面摺出し之電信機兼御國々御注文も相成ぬを御覽旁其製作所御越尤當所ミニストル其外役々御案内申上種種の電信機御一覽夫々鳥獸の眞形數多集置し場處御案内的砲稽古場御越二三發御試砲なる湖水涯なる客舎御越尤高松凌雲箕作貞一郎山内文次郎澁澤篤太夫は天文臺觀月樓等一覽なる右之客舎に罷越まホテルなる御夕餐相濟第六時汽車御乗組夜九時ベルン御着先刻は外國奉行栗本安藝守組頭三田伊右衛門外ニ馬寨里なる待受ふる杉浦愛藏山内六三郎共着しありとて御出迎申上る

八月十四日晴

昨日栗本安藝守到着御老中方若年寄衆を御機嫌伺として書狀御品共差越せし旨申上る尤品は巴里表に相廻せしとて書類而已差上る石見守を右御返翰相認杉浦愛藏歸國に托し送遣を室賀伊豫守原市之進をも御用狀差越候ニ付同様返書差遣を

九月十一日

此日向山隼人正若年寄並七千石高被仰付栗本安藝守御書付類持參ニ相達を外ニ品々被仰越之御沙汰も有之とて本日ハ種々之評論ニ御巡國は隼人正御附添無之石見守保科俊太郎高松凌雲澁澤篤太夫御雇四人シーボルト而已ニ外外國局は總而引分を巴里表に罷歸る旨評決夫是手筈相定め諸書類調分いふを此日明後十六日當地御出立荷蘭國御越被成旨瑞西在留荷蘭コンシユールに書翰差遣を

白耳儀國御巡國之儀ニ付同國とて書狀を以申立來八月廿五日か廿八日九月廿二日本國祭日ニ付御來訪被下度旨申來る因る可成丈操合せ罷越候様九月廿五日迄

可致旨返翰差遣を

八月十五日晴

九月十二日

明日當地御出立之儀相定御道筋取調いふを向山隼人正始外國向役々は引分を巴里に罷歸ニ付御用向調分いふを第一時杉浦愛藏山内六三郎巴里に出立いふを

夕六時大統領を御招請申上ホテルデウロツバと申旅宿ニ夜餐御饗應申上る御逢之上御供之者一同罷越を

八月十六日晴

九月十三日

朝御道筋取調本日第一時半御發御徹夜十八日四時荷蘭ハアへ御着と相定其段在留之ミニストルに申達を同國留學の御國生徒へも申遣を澁澤篤太夫ヲリエンダバルパンクニ千ポンド爲替佛價ニ請取大統領其外に御遣し品書記官に相渡御附添申上し書記官に被下物有之

第一時半御發尤隼人正始外國方役々は半時前ニ發轍一行も減しぬれば車

中寂寥なり夕五時パール御着過日御止宿ありしトロワロクといふ客舎に
る夜餐御調夜九時再汽車御乗組車中御通夜翌曉六時半バアデン國タルム
スタートといふ地ニ御休息汽車御乗替

八月十七日晴又曇

九月十四日

朝九時マイヤンス御着同地は歐州第一の洪河ランヌの涯濱ニ蒸氣船の
便ありは本地を川蒸氣御乗組直ニ出帆ニランヌの流に隨ひ舟行頗る清
駛なり兩岸は總ニ小山或は曠原等ニ其間村落市街の遠近に斷續し流に
隨ひ眺を異にし舟中頗る清興を添ふ併便船なきは乗合多きて雜沓は其厭
ふるきを覺ゆ夕五時ボンヌ御着エトワルドラルといふ客舎御投宿

八月十八日雨

九月十五日

朝六時御發汽車御乗組直に發轍晝後一時頃汽車の儘ニランヌ河を航せ
るは河は、の廣く水深くして剩へ洪水の患ありは橋梁の架すへき術なく
いと大きなる船に鐵道を具せしを水上ニ數多浮め置汽車來きは其儘に右

の船橋ニ載せ蒸氣もて船を遣り着岸の後又鐵路を走らしむ其製簡便ニ
尤壯牢なり晝一時過荷蘭國境セイヘナル御着ニ處荷蘭を爲御迎ルータナ
ントコロネルフワンガツベツルレン及御國留學生五人罷出て御迎申上る
暫時御休息する夫をウエツトレツト御着第二時半過ロットルダム御着汽
車御乗替なきはとて馬車にて市街御巡覽直ニ汽車場ニ向又御乗組三時
半發轍をロットルダムはコアスといふ大河に添ふたる一都府に頗る繁
華の土地なり蒸氣帆前船共多く碇泊せり總ニ荷蘭内地へ舶來せし人の上
陸所なりといふ砲臺其他警衛の船杯多く蓄ありといふ四時廿分國都ハア
へ御着蒸氣車場迄國王を爲御迎禮典に用ゆる美麗の馬車三輛を出し側役
パロンスヌーケルトデシヤウベルフといふ者御出迎申上る夫を市街を御
通行ニホテルデペールジュといふ客舎御投宿此日御着の式の見んと土御着
人數多汽車場より群集せり
後御迎に罷出し側役及コロネル共罷出御機嫌を伺へ御安着を祝ま且明日
本地議事堂ニ國國の大禮典なる集會ニ儀有之ニ付御覽ニ旨申上る尤十

二時頃御越被下度旨其外手筈夫々申聞る此夕御安着之旨巴里の傳信ニ申遣を留學生林研海伊東玄伯赤松大三郎松本銈太郎緒方洪哉罷出る研海玄伯大三郎は御滯在中罷出御用取扱之積外兩人は引取勤學可致旨申達を八月十九日曇

九月十六日

朝コロテル罷出御滯在中同人御附添申上候様國王を被命し旨申上ぬ本日議事堂御越之手筈申聞る第十二時御越尤馬車は國王を被差送候禮車ニ公子ハは御狩衣石見守も同様禮服其餘は羽織袴着用ニ御供議事堂の樓上なる棧敷様の處に倚子相設禮式懸之者罷出て御設待申上る一時頃國王及貴官共美麗なる馬車ニ罷來る往來は歩兵隊ニ道を固め王車の前後は騎兵凡四隊宛小隊三十二ニ警衛し王車は八馬を駕せる車ニ每馬御夫貳人を添ふ其衣服及馬車の裝飾いと華麗を盡せり王車ハ隨て聯行せしは貳馬を駕せし車壹輛四馬を駕せし車貳輛六馬を駕せし車三輛王車ともハ七輛ナとし國王議事堂ニ着して中央の小高き處ハ座を設け貴官及諸民の

總代なる者其前及左右ハ羅列し扱國王着座之後懷中ハ一小冊子を出して高音ハこれを讀む其旨趣は其年の無事平寧ハて人民の安息せる哉否を問每事政刑の可否善惡を下問せるニ年々の佳例なりといふ右之式終て直ハ元ハの車ニ罷歸る式終ると公子も同時ニ御退出御歸路市外の林田園の景を御一覽ニハ夕四時御歸館

八月廿日曇晚晴

九月十七日

朝赤松大三郎をアムストルダム「フアンドルマート」スカーペンハ爲替金請取方談判ニ付差遣ス

晝十二時鐵砲製造所歩兵屯所等御一覽三時御歸館石見守保科俊太郎御雇兩人御供石見守は夫々本國議政ミニストル七人の訊問公子御着彼是御取扱有之挨拶申述御名札差遣ス

本日は國王謁見之手筈昨日御附添ニコロテルト申上ルをば御逢之節御口上案御應接振取調夕五時爲御迎禮車二輛其一は國王之馬車ニハ四馬を

駕せる尤美麗を盡せるに御者四人を添或人の御夫は駕せし馬外ニ御先拂之騎兵貳騎いづれも同様禮服ニ無程御附添コロチル御程合申上げは直様御出向石見守御附添コロチルシーボルト第二車は俊太郎篤太夫御雇之者兩人ニあつた五時半王宮御越國王御逢之上太子の別宮に御訊問御逢夫がブランスフレデリーといふ國王之弟御訊問夕六時御歸館此日御面謁之手續は別紙

晝後本地市中惣代ヨンクヘールヘールフルステイトといふ者御安着を祝を英國が在留せしシャルシダフヘール御機嫌を伺ふ巴里とて御用狀到來御着御祝同地平安之儀申來る

八月廿一日晴風涼

九月十八日

此日本地西北之港ニユーヨジツブニ軍艦及其製造所等御覽之旨御附添コロチル申上御供は石見守俊太郎凌雲御雇兩人シーボルト外ニ留學生林研海伊東玄伯等ニあつた朝七時半御旅館を御發し本地の汽車站ニあつた汽車御乘

組晝十二時頃ニユーヨジツブ御着本地の水師提督其附屬士官教員禮服ニあつた御出迎申上數多の兵卒を出して途上警衛せしめ其設待甚懇懃鄭重なり御著之節兵隊捧銃の禮を爲せり直様客舎に御越暫時御休息夫が港口に碇泊せる軍艦に御越之ところ御越の軍艦毎に貳拾壹發の祝砲をなせり尤ブランズアンリイといふ惣鐵船は市街接近に投錨しありしは市中に妨礙ありとて祝砲はなし軍艦に御着之節は水夫は總て帆桁に登らせ最高の橋に御國旗を建御巡覽之節も毎艦に祝砲を爲せり祝砲の數都合九度御一覽後先の客舎ニあつた御晝食夫が病院御一覽夜十時御歸館

澁澤篤太夫フワンドロマトスカツペンに爲替金請取方之儀ニ付留學生赤松大三郎同道アムストルダム罷越を右請取方取斗夜十時歸宿歸路レド多御歸之蒸氣車と同じくなりたれば御供いたして罷歸ぬ

晝後國王が使者差遣し國王及王妃の寫眞進せらる

八月廿二日晴

九月十九日

此日終日御休息ニ御在館記事なし

晝後フランスフレデリ及アレキサンドル魯國を在留せるミニストル等御訊問申上るロットトルダムミドクトルキルシス御機嫌伺として罷出る澁澤篤太夫小遣綱吉召連を朝六時出立巴里に罷越を綱吉儀本地御着之節不穩之働を巴里ニ御方申付るくとて道中小遣としてアンリイをも召連途中無滞此夕十一時巴里着同人ハ御留守取締木村宗三ハ引渡其外諸用相辨其夜は御旅館ホ一泊

八月廿三日晴

九月廿日

朝八時御旅館を御發しアムストルダムに御越十時頃レイデンといふ地ニ蒸氣ニ水を汲ましむる器械御一覽同所ニ御晝食第十二時半再汽車御乗組アムストルダム御着ジャマン製造所造船所及博覽會其外所々御巡覽尤本地總鎮臺及水師提督等御案内申上る尤總鎮臺は本地の汽車場迄御出迎申上る此鎮臺は本國至重之任ニ高才略拔群の者ならてハ其任ニ堪す往昔は其威權稍國王にひとしりしといふ澁澤篤太夫巴里御用濟夜九時半歸着

八月廿四日曇

九月廿一日

朝御取扱申上し數員之士官に被下物之取調のみを晝十時半レイデンといふ地御越尤御雇之書記通辨官シーボルト亡父の別業なをはとて御招請申上たをハ石見守俊太郎凌雲御雇之者兩人留學生三人とも被召連シーボルト亡父は年久しく御國長崎港に滞在したをハ其留滞中取集めぬる奇古之品杯數多陳羅しゐるを御一覽御休息後御慰とて園池に網し二三尾の魚を得御携ニ夕五時御歸館此日同人ハ九谷猪口一組を被下

八月廿五日雨

九月廿二日

午後一時太子之弟アレキサンドル御訊問石見守俊太郎御供のみを白耳義國シャルジダフヘールハ明後日當地御出立其都府に御越之旨并御供名前書共申遣ま且夕五時石見守訊問毎事談判可及旨をも書翰ニ申遣ま

八月廿六日曇

九月廿三日

御滞在中御世話申上し者共ハ被下物有之此日國王ハ再御逢之ニ付夕五時

とゞ御越石見守俊太郎凌雲篤太夫御雇兩人シーボルト御供其手續は謁見の節のこくとく御迎之馬車罷越し王宮の入口を正面より二間を御行越し一の廣間にて御逢數々御懇談ニ御引取此日國王は小禮服ニ御逢申上る公子御供之向は平服ニ御越相成御越之節は國王次の席迄御迎御歸シ之節は馬車御乗組之處迄御見送申上る其御設待甚懇懃なとゞし

夕六時半御滞在中夫是御取扱申上ぬるヌスカール及御附添コロチル其外留學生とも御同案之夜餐被下石見守俊太郎凌雲篤太夫シーボルト御相伴石見守外國ミニストル始外役々の御暇之た免可罷越之とて在宅無之趣ニ付コロチルを以御挨拶申遣夜白耳義國ミニストル罷出御機嫌を伺ふ明日同國御越之御程合同度旨申聞る石見守面會手續申談し罷歸る

八月廿七日晴

九月廿四日

朝巴里に御用狀差出を御用行御用狀をも封入差遣を

此日御出立之積ニ付早朝とゞ旅裝御整第十時半御發ヌスカールは汽車場

迄御見送申上る國王の蒸汽車を以國境迄御送之旨申聞る御附添コロチルはロツトルダム迄御送申上留學生徒は荷白國境ヨウセングール迄御送申上る第十時四十分國都ハアへ御發十一時半ロツトルダム御着夫を蒸氣船御乗組ムールデーキ夫を再蒸氣車ニ乗ヨールセントアル御着之處白耳義國とゞ爲御迎國王之汽車差出し御案内之者罷出る夕第六時國都ブリツクセル御着同處汽車場には第一等禮式懸及甲必丹ニケイズ美麗なる車を備へ御出迎六時二十分御投館此日汽車場を御旅館迄見物人途上を充滿し多く冠を取り敬禮を爲せり汽車場は爲警衛兵士并市中取締之者多く差出せり

八月廿八日曇

九月廿五日

朝カピテインニケイズ罷出本日國王御逢之手筈申上第一時御迎之馬車可差出旨申聞る御贈品は御逢之節持參御附之者より引渡可申其外手續申談罷歸る第一時御迎之馬車三輛尤壯麗を盡せる裝ニ御越之第一車は爲御案内甲必丹ニケイズ保科俊太郎高松凌雲澁澤篤太夫第二車は公子石見守御

迎之禮式掛シーボルト等御供第三車は御雇井坂泉太郎三輪端藏等なり二時半御逢濟御歸館御逢之手續は別記載したまは此略す

御歸後外國事務執政御機嫌伺として罷出る御理髮中ニ付御逢ハなし第三時半石見守俊太郎カビテインニケイズ案内ニ付諸貴官は本日之挨拶として罷越今朝第九時巴里の御用狀差出を隼人正宛佛國博覽會掛之書狀壹封差込相送る

夜七時半甲必丹御案内ニる王家之劇場御越石見守俊太郎凌雲篤太夫井坂泉太郎三輪端藏シーボルト御供十一時御歸館

八月廿九日晴

九月廿六日

朝十時半陸軍學校御越火術精舍術御一覽夫の兵隊屯所御越歩兵手前小運動御覽整頓裝填の舉動より運動行進之所作迄甚靜肅として謹嚴なり別ニ木杖運用之舉動は軽便にして勁捷なり亂軍より彈藥盡し節銃を以て相接する爲の訓練なりとい終り細き鐵ニる作りある筈ニる相撃の技を爲さしむ面覆及小手等は御國演撃具ふひとしく其製甚卑疎なを相撃之法軟弱ニる迂濶なを畫十二

時御歸館三時とぞ尙又本地博覽會御越往古以來之武器其外種々之奇古珍有之品御一覽夫の王家の園林華園御巡覽夕五時御歸館石見守篤太夫博覽會とぞ御先不歸宿シーボルト同道宇漏生公使館に罷越在留之シャルジダフヘールフランスクロワ不面會同國御越之手續申談同人を本國都府に申遣し御程合早々可申聞旨引合罷歸る

此日は本地の大祭日ニる夜八時頃都府北邊の郊ニる觀花の舉るニ付御越之儀カジテイン申上夜八時半を御越一同御供同車ニる行程一里計ニる郊外のいと曠濶なる處不設けある王家の棧敷不御越ニる御一覽本地當夕の祭典は先年當國初代之王荷蘭を分割して獨立せし祝日ニる年々の舊制郊外の曠き處に高き竿を建其竿ニ麻繩を張壹人の曲藝師美麗ニ結束して繩上を歩竿の長拾五間繩の徑三十間もあるべし其曲藝師手不長き竿を持繩上を徐歩し行止りて後面不逆歩し兩三度往返し終不は疾歩如翔或は中央の繩のたるみし處ニる繩不手を掛けて足を投し身を翻して繩上不逆上し壹足不繩を掛けて

身を翻投し看官をして心悸魄慄あらしむ曲藝師休息せる時は様々の細工火絶間もなく空中を装點し末尾に彼の曲藝師を持し竿を火を發し己は火中に入りしる火光を而も其姿見へも火光稍鎮むる頃又繩上を徐歩して休息の場を達せ此時其下の觀火場を數千發の細工火一時に連發し青紅紫白の火光中天を翻騰し尤奇觀を極めたり技曲濟ぬをば夜十一時御歸館此群衆の見物人凡貳万人余り其細工火の經費僅一万五千佛程なりといふ

八月卅日晴

九月廿七日

此日は本國有名なる然も歐洲を秀しアンベルスの礮臺御覽に入ると朝九時半御旅館御發し例の甲必丹御案内本地の汽車站に王家の汽車御乗組十時頃一の礮臺に至る其礮臺の製外面は總て土に築立屈曲せし長堤の如く堤の下は深き溝に水平面を充溢せり内面の入口兩所に鐵橋を架しこれを通る礮臺の制開布せし扇面の如く外面を横衝して其堤の内は石と瓦とに築立螺旋せし土穴を多く設置して其中に彈藥礮諸器械の貯所

及兵卒屯所等を設置きまゝ其扇面の要とをき處の一の宏壯なる礮礮を築置けり其外面と要領と相通せる處は堀廻はせし溝相接して僅に七八間の土坑なり土坑の兩側に拾門宛の大礮を備へたり交戦の節外面の礮礮に相接し萬一戦争利を失ひ敵外面を侵襲せし節は其要領に防禦せる爲なりといふ其製宏壯緻密なること一歴覽の識得るところにあらざらん御一覽後再蒸氣車に第十二時半アンベルス御着同所客舎に御晝食御休息後本地を周圍せし礮臺逐一御巡覽或は其未成中建築の仕方又は已に築成して礮礮の設方等逐一御歴覽夕五時汽車御乗組六時過御歸館本國は周圍陸地に海軍の備なき故に陸地戦争の設は其精を究めしといへりアンベルスといふ地は本國要領の場所緩急の節は國民を同所に移し國を擧てこれを衛る故に其周地は總に礮礮に其繞圍連築せし外に前不見及ぶる礮臺を八ヶ所設置互に持角の勢を爲し敵の侵襲を防禦し其兵食を充實して國を合せてこれを守らは歐洲擧て攻撃せとも能其防禦を堪ゆへしとい

へり此日は御附之者一同御供アンベルス御着之節同所ゼテラル御出迎申上砲臺御覽之節は勤番せし士官御案内申上る其兵卒は總る捧銃の禮を爲せり

九月朔晴

九月廿八日

此日も昨日御覽せし砲臺の残れるを御覽ふ入るとして石見守俊太郎御雇の者兩人シーボルト御供ニ御越砲車製造所諸器械及彈丸の製造等御歴覽夕五時半御歸館

九月二日曇

九月廿九日

第十一時御寫眞御越石見守御雇兩人シーボルト御附添カピテイン御案内申上る十二時半御歸館三時半市街御遊覽夕五時御歸館夜七時半とて劇場御越尤本夜の劇は公子の爲み設しとて舞臺の周圍は警衛の兵を出し舞曲も尤華麗を盡せり座頭の者罷出御來臨之忝なきを謝し其設待周旋總る國王見物之節と同等なりといふ十一時御歸館此夕巴里表を御用狀到着

九月三日晴

九月卅日

朝八時汽車御乗組リエーシといふ地ニ銃砲製造之器械御覽ふ入るとして御附添カピテイン御案内石見守俊太郎篤太夫御雇兩人シーボルト御供十時リエーシ御着大砲製造所御覽十一時半本地客舎ニ御晝食夫々同所小銃製作所御一覽一時頃を尙又汽車御乗組シラアンといふ地御越製鐵所石炭掘出之器械砲車の製造蒸氣船蒸氣車器械之製造等逐一御歴覽夕六時半リエーシ御歸先の客舎にて御夜食八時汽車御乗組夜十時半御歸館此日御覽ありし製鐵所は尤盛大安壯なり其周圍凡三萬坪程ニ其職人七千五百人を壹萬人程なり壹ヶ年の製作金高例三萬フラン程なりといふ先年英國の人ニツクといふ者本地より來り製作を初めしと追々其業廣大となり當節は歐洲中の尤なりといふ御着之節同所總裁之者其居宅に御請招申上御歸之節も御立寄御休息有之

九月四日晴

十月朔日

此日マリトヲワニエトといふ地ニ鏡及硝器之類製造所御覽ふ入るとして例のカピテイン御案内石見守俊太郎凌雲御雇兩人シーボルト御供朝九時半御發蒸氣車御乗組十一時同所御着當所會所迄四輛之馬車を備へ製造

所掛之役々十人計御出迎申上る其製造所之總裁は其男子を騎兵ふ仕立騎馬ニ御出迎申上る總裁居宅の前ふ御着の頃三拾人余の樂師を列ね奏樂して御着を祝ま其表口ふは總裁の縁親なる婦人四人御出迎夫とて總裁の家ふ御休息御晝食御晝食之節前之縁戚之者御同案ニ御接待申上る尤別席は夫が前の樂師奏樂してこれを賀す其御饗應いと善美を盡せり製造所御越逐一御歴覽御歸之節は道路の兩側ふ相襟りし諸職人の立並ひ祝詞を呈ま其人數凡三百余人なりし其前ふは以前の樂師奏樂して御歸路を御見送申上る御歸掛尙又總裁の居宅御立寄之處表之方ふ貳百人余の婦人之職方打揃いゑる粧ふて相列して祝詞を呈ま總裁の家御立寄後相集りし男を發し其響いと盛なりし御歸之節總裁初役々七人蒸氣車迄御見送申上る夕五時半御歸館

當國王に被遣候とて大君の御寫眞額面調方篤太夫市街ニ注文いゑま
九月五日曇

十月二日

朝巴里に御用狀出ま當地御用濟字國御越之日限凡取調之儀等申越ま御用

意品取寄方之儀申遣ま

晝一時とて繪圖學地理學校等御越本國之精細地圖及歐洲全圖其外砲礮築城等之諸繪圖類御覽夕五時御歸館夕方字國シャルジダフヘールが同國御越之儀洋歷九月十日頃御着有之度旨申來る

九月六日晴

十月三日

朝十時半カピテイン及王家の全權なる本地及近傍山林を支配せる者罷出チユウルンといふ處ニ本日御獵御慰之儀申上同時御發ニ御越石見守俊六郎御雇兩人シーボルト御供申上る其畋獵場は王家の園苑ニ四圍拾町余もゐるを尤幽靜なる土地なぞ茂樹叢鬱として四方は土塀ふて築立其内各處ニ溪流ありて禽獸の其的ふ來り安き様なし置ぬ貳十人余の勢子四方を伏匿せしを追出し其小溝を廻りて走るを射る獸は鹿兎之類多し此日之獲は鹿五疋兎六疋を得たり其園苑に飼置ゑる鹿凡七十五疋兎は其數を知らまといふ夕六時十五分御歸館此日は午餐その山林の草薺中の一の食盤を設け御供之者相集りて御同案申上る其

野興頗る清味
な究めたり

此夜カピテイン其外御案内之者の御同案之夜餐被下其驅馳せし獵師一同
の骨折し爲なまはとて佛貨三百フランクを被下

九月七日曇

十月四日

朝巴里の御用状を出し御出立延引之旨御用意品取寄方之儀等申遣を晝二
時白耳義國ミニストルドラメイゾンデユロワフアンブレットの公子國王
再御逢之儀ニ付石見守の書翰相達を

明八日調兵場におゐて公子御覽のた免調練を御覽に入るとて夫々手筈之
旨御附添カピテインを申上る且當日は御乗馬にて御覽有之度則御馬差出
候旨申上げを右御乗試とて晝後一時半を石見守俊太郎シーボルト御供
調兵場御越御試有之夕五時頃御歸館

九月八日晴

十月五日

此日公子御覽の爲とて都府外の調練場にて陸軍三兵の火入調兵有之旨ニ

晝十時半御迎馬車罷越御召車は美麗に修飾せし四馬を駕し六人の御
者其四人は馬車に添ふて其貳人は駕せし馬を騎り外ニ御案内とて壹人
の騎馬を御車御前を拂へり御供は石見守始一同ニ晝十一時半御旅館
御發王宮の前衢を右ニ折して並木の植列ねるる大街衢に出夫を左折して
拾町余郊外の調兵場に至る其並木を大衢の左に方ふ此日調練をるる兵
隊の順序を以て陣列せり御通行之節歩兵は捧銃の禮を爲し樂手隊は賀樂
を奏せり其士官は總て手を持るる劍を笠て敬禮を爲せり公子の調練場の
御着之頃先の陣列せし兵隊は各其頭ニこれを指揮し護送し調兵場に至
る公子は調兵場の王家の棧敷ニ御休息のところに其護送せし兵隊は調兵
場の各處に陣列して夫を攻撃襲討之舉動あり此日之人数は歩兵三大隊大砲壹座
騎兵三隊其外樂手隊共其勢二千五
百人余なりといふ尤火入調兵なりしは各隊連
發の舉動を爲せし節は頗る壯烈な極めたりし

右舉動終て兵隊整頓之上本日之ゼテラールロナイル棧敷に罷越して御挨拶
申上公子も御慰勉に御答禮夫を公子は御馬に被召各隊の陣列を御一

周尤ゼテラールロナール御附添カビティン石見守俊太郎シーボルト等御
 供ひもそ公子の各隊御一周之節は總て捧銃賀樂の禮を爲せり公子此日の御
 裝束は陣御羽
織なりし其華靡壯麗ニ馬の上御旋行の雄々しきさ
 ま兵隊は更なり群集の見物人とも感勝の聲を發せり兵隊陳列之前御一周之上尙又
 前の棧敷に御引取二時過御歸館此夜本日のゼテラールロナール御附添カ
 ビティンの夜餐被下昨日石見守を申遣候返書到來明九日國王御逢之旨申
 來る

九月九日曇 日

十月六日

朝巴里を御用狀到來御用意品差立候旨申越を朝十一時昨夜差越候ミニス
 トルプレットに石見守を返翰差遣を夕六時カビティンニケーズ御迎之馬
 車を備へ今夜王宮ニ夜餐を差上る旨申上る馬車は最初謁見の節と同じ
 く第一車は公子石見守カビティンシーボルト第二車は俊太郎凌雲篤太夫
 其次は御雇兩人御供ふて王宮の副門ニ御下乗階子を御登り直ニ國王の
 居間の次席なる扣席御越此日御接伴ふ與りし側向の貴官陸軍惣督其外役

役罷出御迎申上る扣席ニ暫時御休息夫を國王の居間御通を尤石見守シ
 ーボルト御供ひもそ其余は扣席に御待被上る御逢之節種々御懇話夫を國
 王御同道ニ次之扣席に御越國王の紹介ニ其貴官之向に一々御面會夫
 を御供之者共公子を國王に御引合被成右相濟て食盤の間御越國王は食盤
 の中央に座し其右に公子御着座石見守始以下も御接伴之貴官も次を以て
 列席ひもそ其夜餐中を次なる一間にて奏樂あり割煮調理之美善を盡せし
 とて器皿盃盤の華靡を究めしと眞王家の饗禮を覺ゆ夕六時半とて夜
 餐相初り八時半頃終宴夫を再び國王の居間に御越ふるカツフヘー及種々
 の美酒等被召上夜九時御歸館

九月十日雨 月

十月七日

明朝當地御出發の積候付被下物其外取調ひもそ朝御取寄品之儀ニ付シバ
 リオンに電信差出を午後二時石見守俊太郎外國事務執政内事執政陸軍惣
 督等に御滯在中の御挨拶として罷越を三時頃孛國在留ミシャルジダフハ

ル罷越同國御越之儀差支候旨申聞る且爾後御日限も耽と申聞兼候旨因
る明後十二日御出發御歸巴之旨決議第四時巴里の電信ニ申遣也
夜七時シバリヲンとて今朝差出せし電信之報來る

九月十一日雨 火

十月八日

朝七時半御發マストリックレグーといふ者荷蘭國の豪家にて御請招申上
けは御越石見守俊太郎凌雲御雇兩人シーボルト御供陶器硝器製造之場
所其他種々名苑奇亭御一覽午餐夜餐とも同所主人御饗應申上尤鄭重を盡
せり夜九時半御歸館

朝巴里の御用狀差遣を御旅館取仕末之儀等申遣也

九月十二日曇 水

十月九日

朝九時發朝之汽車御乗組夕五時巴里御歸館尤此日は爲御見送カビティン
ニケイズ罷越御同車ニ二度目の會所迄御送申上る汽車は國王の車ニ
御送申上る夕五時巴里御歸着

澁澤篤太夫儀御取寄品未着ニ付御跡殘はし本日十二時到着ニ付蒸氣車
會所に罷越請取方取計夫を御附添之甲必丹其外共被下物取調之上引渡也
其夜同所一宿はなむ

九月十三日曇 木

十月十日

朝九時澁澤篤太夫ブリツセル發第五時巴里着夜六時過石見守俊太郎篤太
夫御用ニ付シャルグラン隼人正旅宿に罷越也

九月十四日曇 金

十月十一日

朝荷蘭赤松大三郎を爲替金之儀ニ付篤太夫の書狀差越也第三時石見守コ
ロ子ル御供ホワテブロン御越し第四時御歸館夜九時隼人正安藝守御旅館
に罷出る御老中若年寄を被進御品安藝守持參差出也
夜石見守篤太夫シャルグランに罷越也

九月十五日雨 土

十月十二日

第一時隼人正安藝守三田伊右衛門フロリヘラルトシベリヨン等御供博覽

會御越夕五時御歸館第二時石見守シーボルト以太里公使館に罷越同國御越之儀引合およふ

夜石見守篤太夫御用談ニ付シャルグランに罷越也

九月十六日曇 日

十月十三日

御旅中諸勘定向取調篤太夫を田邊太一に引渡を御有金御入費共積譯取調に命じ

夜七時シルクデアンバラトリース御越安藝守石見守其外生徒共御供十一時過御歸館

九月十七日曇 月

十月十四日

午後伊太里在留之公使同國御越之儀ニ付罷出御答申上る本月廿日御出立御越之積申談罷歸る夕四時試砲御越第三時石見守篤太夫御入用筋御用談ニ付シャルグラン罷越也

九月十八日晴 火

十月十五日

晝十二時伊太里公使館に同國御越之儀ニ付御道筋并人數書相添書狀差越を御入費筋之儀ニ付石見守篤太夫シャルグラン罷越也

九月十九日晴 水

十月十六日

朝御乘馬御越夕方白耳義國御滞在中御附添之カピテインニケイズ罷出る同國王女太子に被遣之御品引渡を御巡國御入用日比野清作を篤太夫請取

九月廿日曇 木

十月十七日

朝御國行御用狀差出を第一時保科俊太郎澁澤篤太夫巴里在留荷蘭公使館に罷越し同國御越中御附添せしコロテルカツバルレンに被下物引渡也

此夕意太里國御越之手筈兼を御治定なりしは夕八時御旅館御出發尤御供方并汽車場迄御見送之者等は七時半を御旅館を發しカールデリヨンニを御待申上る無程御越ニお八時四十分發軔之汽車御乗組ニを御發し相成

此夜華人正三田伊右衛門田邊太一本村宗三其外御旅館御留守之者外國局之者一同御見送申上る會津藩二人唐津藩壹人も御見送申上る

此夜汽車中御徹夜翌曉六時頃アンペリウルといふ處ニを御茶被召上暫時

御休息

九月廿一日雨 金

十月十八日

昨夜とゞ行路の澗峽に入るとしるは新寒稍増して衾被の薄きを覺ゆ朝來細雨如針殊に鐵路の兩沿は總て山岳の蒼々峨々として或は危巖怪石の突兀として途頭を蟠せし處は汽車其洞中を横衝してこれを過り其溪澗之深潭ニは鐵橋を架して是を通し行程愈峻峻にして鐵路愈堅牢なり此邊は惣て巖石炭を生ぜり木々は漸霜紅を帶て各處に其眺第一時サンミセイル御着午餐鐵道を改め雨中汽車中の眺望其清閑之餘味ありも此所限ニ是とゞ先は馬車ニ山中を越ゆるなせば夜中の行程不便なるを以て此日は同所御一泊と相定め午餐中同所客舎を求めしに邑中僅壹軒の客舎ヲテルデポストといふ而已ニ家を一挙て一行の人を宿せるに足るを以といふサンミセイルは意太里國スーザ一途行程凡十時其間宿すへきの地なり中ニ徹夜しぬるも其益なしと二時半頃ガールニ馬車を雇へしが壹車而已ニ其夜は同處ニ一泊いふ一行を駕せる能ハさせば半は公子子供して半は其馬車の再び還り來る

を待せりガールを右に折して隘衝を行過て一の往還に出又右に折して客舎に至る客舎の主人驚きゑる体ニ相迎ひやめて樓上を誘引し各其部屋に附し陋隘いはんのゑもなく尤不潔を極めたり御着後馬車を雇へ邑中四山の風色を御遊覽夕三時頃御歸館此地四面峰巒崔嵬として最高之嶺は既に積雪あり陋屋之風寒衾被の薄きを恐しる幸に此夜は寒氣弛ふして一同安然の想をなせり

九月廿二日曇 土

十月十九日

拂曉とゞ旅装を理し朝六時御出發いと大きなる貳輛の馬車を雇へサンミよりスーザ迄山路峻峻にしていま鐵路の設なければ一行乗組し上諸荷物を人の此路を取るは總て此馬車も山路を越へざるを得ず載せゑり其馬車はジリジャンとて巴里邊ニ用ゆるラムニブスといふ車に同しく行路悪しけを六馬或は八馬を駕せり客舎を發して峽路を曲折し或は溪に添へ又は坂を攀ち八時頃一村落にゑる村中汽車及鐵道を製する器械あり或は佛國商人の戮力して汽車を此峽路を開きいと廣大なる巖山の半腹を洞し汽車を平垣に意太里國迄達せし然んとする爲に右の器

械等を開きしみて未成なきとも日を追て其成功を見るしといふ又馬車通行の路傍には別々小さな鐵路を造作しあり是は米利堅人の發起にして從來の峽路に添て小汽車をこの山に通せし然んとする爲なりといふ其危巖の崔嵬ある處はこれを洞突し峯峽の懸絶せし處をこれを棧架し其精巧實は天造を自製せんとて山行の深きに隨ひ峽路も峻峻なり霜を帯る葉は微紅錦を疊み巖に咽ふ泉は純白素簾を劃せし滿山總に巖石なる高聳骨立し尤松檜之樹多し峽路の稍窮まるとし處よと攀躋凡一時程尤峻岨にして且高し漸くして絶巔に達す其攀躋の尤急岨なる處は馬車の勞を助けんとて公子始車を望辨し難けきとも奇峰懸岨の雲霧に出没して其貌を改むるも頗る雅興を添ふり山の絶巔中腹には新雪處々に堆く攀躋の疲勞せし頃は積雪を取りて湯に霽す其味清絶なりし絶巔に二三の人家あり馬車の替馬を出し及鐵路を造せる工人の泊まる家なりといふ次其初は六正中は七正峻峻の處は拾貳正を駕せり其巔窮て降らんとする路傍に石杭あり佛蘭西意太里兩國境の封柱なりといふ夫は山路下低して漸平夷なり下阪の半よと雲霧晴て初る意太里の諸山を見る其眺望絶佳なり

夕四時半スーザ汽車會所御着之ところ意太里國爲御迎コロネルイシヤグエードボヲヤニといふ者罷出て御安着を祝す直ニ汽車御乗組夜七時チユラン御着ホテルデヨウロッパといふ客舎御投館御案内之使番も御供して罷越明日御遊覽の爲免同所御滞留あり度儀國王とて申越さし旨申上罷歸る此夜巴里に電信差出を今日當地御休息明日フロランス御越之儀申遣

九月廿三日曇 日

十月二十日

朝十一時コロネル罷出御案内申上一同御供ふて本地國王の別宮及古代の武器貯所其外説法所等御巡覽第一時御歸館別宮の立關及階子共總多マルブルと殿は總多金ニ多影鏤し巨大なる油繪の懸額あり武器藏所には諸國とて集めたる刀劍甲冑小銃の類多し其中に御國騎馬武者の形ありし其甲冑の着し方馬具結束之法多く其實を得は御案内之者喜んで拜謝せり

夕六時同所御出發汽車會所に御越六時廿分發軔之汽車御乗組尤御附添せし使番も御同車申上る翌廿四日朝八時都府フロランス御着ガラントヲテ

ルデベエイといふ客舎御投館汽車場迄禮式懸シバリエーギユーリヨウチ
ニ外壹人御出迎申上る

九月廿四日曇 月

十月二十一日

午後巴里に御用狀差出む 終日御休息記事なし

九月廿五日雨 火

十月二十二日

朝九時コロネル及禮式懸之者罷出本地國王の別宮御覽み入るとして石見守
俊太郎凌雲御扈從向兩人シーボルト御供別宮みて種々奇珍の品油繪石細
工等御一覽十二時御歸館午後英國在留公使罷出る

九月廿六日曇夜雨 水

十月二十三日

朝九時御附添コロネル及禮式懸御案内本地議政堂并本國名産の石細工ザモ
イフと等御覽み入るとして石見守俊太郎篤太夫御雇の者兩人シーボルト御
供ふる御越昨日御覽みし國王別宮の續きなる廣大なる堂宇に御案内油
繪御一覽夫を議政堂御越議政堂の中央みは國王の油繪を懸け其左右み諸

人の會議所を設け其兩面は大きな油繪の懸額あり先年意太里國戰爭の
圖なりといふ會議の式は年々洋曆十一月とて四月迄諸民の惣代政府に加
祖之者及其議み反せし者を左右み分ち中央みは國王及諸貴官ニある一の國
論を出し是を討議せしめ其可なるを折衷すといふ國議に反せし者は其左に位
加祖の者其右に着座すと
ふい又別み高き棧敷を設け置各國を在留之公使を引て其議を與聞らしむ且
其面前の高き棧敷みは本國ミニストル始貴官之婦女罷出てこれを聽聞せ
といふ御一覽後石細工所御越種々奇珍之細工御一覽石細工は本國第一の名産
に多黒き硯石様の石に種
種の模様を琢き出しあるもの也其精巧緻密ニ多製作も甚優なり其製作し出す品は食盤
小机筐石板及婦人の胸掛の類多し一の小筐石板を製するも五六ヶ月を経て其功を遂く其
精密なるは十年十五年の歳月を積て其成功を果す紫青紅白黄黒種々の石品を集め人
物樹木花果其他種々の模様を琢出す其美麗にして眞に迫る彫刻畫描の比にららず

畫十二時御歸館

九月廿七日晴 木

十月廿四日

此日國王御逢之積禮式懸之者申上朝十時王車貳輛を備へ御迎申上る尤國
情云々も有之不表立様御逢致度因て御陪從人數可成丈御減し被下度申聞

石見守御雇兩人シーボルト御供十一時御逢濟御歸館御逢之手續は別ニ記
しゑればこゝに略す
夕六時御附添コロチル罷出今日御懇篤之御逢相濟絶境隔地比隣の御親睦
を結ふことを得るは全

大君殿下御厚意且公子遠路御來臨あらせし爲なをば右拜謝の意を表する
も先同國貴重のデコラシヨシ差上度國王申越候旨申上る尤石見守俊太郎
凌雲篤太夫へも其等を以被相送る夕七時半劇場御越御附添コロチル禮式
懸之者御案内石見守以下一同御供王家の棧敷ニ御覽御逢之節御取扱申
上し第一等禮式懸及陸軍惣督等罷出て御挨拶申上る夜十一時御歸館

九月廿八日晴 金

十月廿五日

明廿九日本地御出立ミラン御越之積ニ付御滞在中御取扱るしコロチル
禮式懸之者に被下物取調夜御同案之夜餐被下被遣品は石見守を引渡を一
同拜舞して御禮申上る

禮式懸ソソエキセランスルヂユクドサルテラナ同ルマントメナブレアの

御滞在中の挨拶として石見守と名札差越を夕三時馬車ニ都府外の郊

御遊覽五時過御歸館郊はアルノといふ都府東北の山を流出す
河に沿ふて樹木繁茂して頗る遊歩に宜し

當時意太里國は元同國セテラル相勤めしガルバルジといふ羅馬廢滅
佛法掃除之説を唱へ意太里政府貴官之者も同説の者多く頻り國王不迫
りし其淵源尤深るをば其説次第不延蔓し佛蘭西國を羅馬加勢の多
免人數差出し意太里に戦使を越し羅馬不代て戦争可及旨被申越國王も
固く佛國と戦争の意なけをば夫是時機相延し候處ガルバルジの奇計不
て國民頻り騷擾し舉て羅馬攻襲の勢をなし其中不は羅馬不潛入して處
々攻撃よおよひしよし遂に佛國との和議破るをば國を舉て佛國と戦はさ
るを得さるとて國王は更なり政府も大に騷擾し討論日夜止まるといふ

九月廿九日晴 土

十月廿六日

第一時半都府東北の山眺望不佳なるとして御附添コロチル御案内石見守凌
雲御扈從兩人シーボルト御供ニ御越夕四時御歸館

夜九時英國在留之ミニストル書記官差出し本國を申越之旨有之候ニ付公子意太里近海之英國所領之マルタ島の御遊覽被下度尤軍艦を以御迎申上候旨申上る尤本夜は意太里別都ミランといふ地御越之積兼御手筈相成ぬを來十月三日再び本地の御歸之上御越可相成旨御答相成夜九時半御旅館御發し汽車御乗組十時十五分發軔其夜汽車中御徹夜翌朝十時ミラン御着ヲタルカプウルといふ客舎御投館

十月朔晴 日

十月廿七日

朝十時ミラン御着直ニ太子附之セテラール罷出て御安着を祝き明日太子御逢仕度旨申來るミランは意太里國一箇の都府ニる般富之地なり街衢も廣く人口も稠密なり市戸の布置佳麗にして生業も富饒の様子なり先年意太里王チユランの都をフロランスニ移せしるフロランスハ街衢陋隘ふて都府不便ならざれば再び此地ニ移さんと欲せしが其經費の多きを患ふていまも其意を果さざといふ客舎の前ニ市人戮力して造りぬる廣き園あり

奇草佳樹を植並へ處々石泉を注て頗る遊歩ふよし此日は日曜日なをば遊歩なら我公子を見んとて園郷の女兒客舎の前ニ充滿せり第三時太子とて馬車二輛を差越し其セテラール罷出て市中御遊覽の儀申上る石見守俊太郎凌雲篤太夫御小性兩人シーボルト御供市街御遊覽夕五時御歸館此夕御案内之セテラールは御同案之夜餐被下夜太子を使者を遣し明日太子の旅宿ニる御逢之上御誘引申上本地の園ニる畝獵相催御慰申上度旨申越を

十月二日雨 月

十月廿八日

昨夜より雨降出し御催之獵御越相成兼ぬを朝十一時石見守シーボルト御小性兩人御供太子の宿所御越御逢有之晝十二時太子御旅館迄訊問暫時御雜話申上引取第一時大君殿下之御寫真公子の御寫真共御送相成夕方太子寫真二枚爲御禮差上る

夜九時發軔之汽車御乘組汽車中御通夜翌曉七時半フロランス御着最前御投宿ありし客舎に御投館

十月三日晴 火

十月廿九日

御着後直ニ英國之ミニストル罷出御機嫌を伺ふ且マルタ島御越之儀英國女王申越せし旨申上則當地近港に軍艦ニ御迎申上候積右軍艦未着ニ付暫時御休息相願度由申上る巴里に御用狀到來に由を荷蘭カツベルレン被下物之謝狀差越也

十月四日晴 水

十月卅日

朝巴里に御用狀差出を英國に御招待ニ付公子マルタ島御越可相成旨申遣を第三時市中の囿園御遊覽石見守御扈從之者兩人シーボルト御供第四時頃御歸館

十月五日晴 木

十月三十一日

朝六時御旅館御發し蒸氣車ニ乘ビイザといふ地御越王家之囿ニ至る第九

時十五分同所御着汽車場には其地畋獵之事を宰する者罷出て御迎申上る直ニ馬車御乘組當地有名なる寺院御案内御覽此寺院中ある丸き塔頗る奇製ニ其造立斜にして轉せんとする者の如し高さ貳拾間余もありて尤壯牢なり御一覽後客舎御越ニ乘り午餐十一時客舎を發し王家之苑に御越御休息夫を畋獵御催之ところいま勢子人數整はるとして山林中御遊歩第二時頃を御獵此日の獵は騎馬の勢子二十人四方を驅逐し銃を取る人は小さき松枝にて作りある小屋に潛居し其逃去る處を射る此日の獲鹿六頭なりし第四時御濟馬車ニ乘り汽車場御越第五時發軔夜七時四十分御歸館此日騎馬の勢子其外御

十月六日晴 金

十一月一日

朝十時昨日御獵ニ獲せし鹿二ツ畋獵主宰のものより差上る其一を調理し御陪從一同に被下其一を英國に在留之ミニストルに御遣相成當國王の大君御諱伺度旨申立ければ

大日本大君源慶喜と記し洋字譯相添送り遣を夜過日國王に差上しデコラ

アシヨン證書御附添コロチルを以差上る石見守以下へも同様差越此日は御餘暇をば一同を御襟書畫合作之御慰有之

十月七日曇 土

十一月二日

朝英國ミニストルを御迎之軍艦今夕リボルヌ港到着候付今夜同所御一泊明日軍艦御乗組之儀申上る因る本夕當地御出立之積御治定ぬ多む夕四時御旅館御出發汽車場ニ乗汽車御乗組夜七時リボルヌ御着ヲテルデワシントンといふ客舎御投館意太里國を御附添之コロチル同所迄御供申上る御着後英國軍艦便宜承及候處同港規則ニ付外港突入之軍艦は直ニ着眼上陸を不許因る港口碇舶有之候旨船將を書翰を以申立る朝十時半御乗組有之度旨をも申上る

十月八日晴 日

十一月三日

朝軍艦を書狀差出し風洋不宜ニ付御乗組午後三時迄御見合相願度旨申越を朝十時巴里に御用狀差出を午後三時御旅館を御發し馬車ニ乗港口御越

のところ港口迄英國軍艦をバツタイラ貳艘各本國之旗を建其一艘ニハ第一等士官禮服ニ乗御迎申上る

伊太里國を御附添之コロチルは御乗組迄御見送申上て引取る 第四時軍艦御乗

組此日軍艦には色々の國旗を建中央に位せる最高の檣には御國旗を建ふり其船將士官迄總の禮服ニ乗御乗船之節は樂手隊奏樂し兵卒は排銃の禮を爲せり滿船の水夫は不殘帆桁に登せ並立せしめ御乗組直に祝砲の禮を爲するき手管之ところ暫時前意太里軍本船艦壹艘本船間近に投錨せしむは發砲の式なしとて祝砲の式は見合せたり 本船はエンデミエーランといふ壯大なる軍艦ニ乗大砲小銃及諸器械共具足し

然も堅牢を盡せり軍艦故ニ船部屋の設けなけむはとて假に船將の有せる舳の方ニ乗御部屋を設け御供之者も彼所是所不休息所を出來せり御乗船後船中御巡覽風洋よろしきとて直に御出帆之積之處先不投錨せし意太里船の誤て錨繩を本船の繩に繫掛しるは互に經連して相解を意太里船に使者を遣し相互に船を運轉し漸ふしてこれを解き夕六時出帆終夜風順ふして舳行穩るなり

十月九日晴 月

十一月四日

曉を風強く船少しく動搖を終日意太里國の南邊を舳行を夜御慰とて水夫

を集め曲藝雜話等をなさしむ夜に入りて風静み船静るなり

十月十日晴 火

十一月五日

昨夜風洋よく舟行如席絶る動搖の憂なし朝十時舳行なら水軍訓練を御覽み入る尤火入の訓練なりしるハ滿船の巨砲連發せし時は頗る壯烈を窮めぬ此日の調兵は船と船との攻撃なりと覺しが其運動坐作駿速にして到壯なりおほりに一隊の陸軍各劍銃と鎗とを持って敵船を乗越ゆる駈引をなさしむ其舉動尤敏捷なりし船中法度寛優ニ嚴肅せり其兵は總ハ水夫ニ平分なし又別に一隊の陸軍を備ふ陸地接近の節戰爭の具なりといふ第三時意太里國の孤島なるストロンベツキといふ火山を際して舳行ま山は洋中み屹立して其貌圓曲みして椀を盛るることく巔の凹なる處を火を發して其烟終歲絶間なしといふ御國富岳淺峰の類なるへし折ふし夕陽なまは海水藍のことく金波處々み濛映し波間み其火山の突兀せしさま尤絶景なり第四時意太里國ニアブルを遙岸に見て舳行ま夜八時舟中の御慰とて水夫の曲藝をなさしむ中に壹人の水夫繩

拔の術を得しものありしる試み御陪從の者をして綿密み結束せしめしふ頃刻にしてこれを解たり其法壹人の男衣服を着せし儘にて一の椅子に腰を掛太き麻繩のいと長きを出し其身體四支を椅子と共に纏縛せしめ尤嚴重に結束し畢る上方身を容るの程大きな布の袋ニ其身を覆ひ其中ニ此繩を解く其結束尤嚴にして其解くこと尤速なり其曲藝も又巧なりし

十月十一日晴夕雷雨 水

十一月六日

昨夜を風烈しけとも舳行穩るに朝十時マルタ御着船此日は御着なまはとて船將及士官の者迄禮服ニ御着の節は船糶を爲し中央の檣み御紋を附ふる御國旗を建兵卒は捧銃の禮を爲し樂手は奏樂を爲せり軍艦の港口み入りし頃兩縁の砲墩ニ一發宛の祝砲を打砲を第十一時頃マルタ鎮台を御迎旁御機嫌伺として其子及其士官を差遣して御安着の祝詞を呈し水師提督及附屬士官七員を具して本船み罷出て御機嫌を伺ふ夫ハ午餐御支度して第十二時半本船のバツタイラニ御上陸のところ本船ニ一發の祝砲を發せり其港口ニ一中隊の歩兵其士官これを指揮して御上陸の節士官は手に持し劍を建兵卒は捧銃の禮を爲せり港口より馬

車御乗組騎馬の御案内四騎其前後を御警衛直様本地鎮台の在留せる英國の官衙に御案内シ當地御滞在中公子には官邸内御止宿石見守御雇兩人官邸御着之節其正門に一小隊余の兵士捧銃の禮を爲し正門に入リ階子を御登之の節階子の登之口迄鎮台始附屬の士官二十人斗御出迎申上階子の兩縁には赤く糺らし壯麗の兵士毎階に並立して御警衛をなせり夫を鎮台及附屬士官御案内申上官邸中の集議場様なる處御越集議場は廣き板敷の廣間にて其正面に四五段の階子あり階子の上なる最高の貴席に御着坐鎮台は其左に立ゑり爲通辨シーボルト一段下りたる階子の片脇に立り其余一齊に板間を並立せり夫を御迎之士官順序を以て公子に御目見申上る鎮台及使番之者側を其名其役名を申上シーボルト通辨申上る其貴戚之向は階を登りて握手の禮を爲し其余は默禮に退し其式壯麗なりし御目見申上候士官式終て後鎮台御案内に兼る相設置し官邸の御止宿あるるき御部屋御越暫時御休息第二時午餐御饗應午餐之節は鎮台の妻及娘等罷出て御接待申上る第四時馬車に市街御

遊覽夕七時半夜餐御饗應鎮台始水師提督鎮台附屬之書記官其外役々罷出る御接待に及ぶ御饗應も美を盡せり

十月十二日晴 木

十一月七日

晝十二時官邸御發し馬車に本地の城中御一覽武器貯置所及城櫓等逐一御歴覽夫を陣馬置所御一覽第一時御歸館午餐後再び馬車に御發し鎮台御案内港口を御乗船港口處々御遊覽港口の右手なる砲臺に大砲の的打御一覽打砲凡半時間程なりし港内に碇泊せる軍艦は悉く水夫を檣桁に登らせ敬禮を爲せり夫をドック及製鐵所御案内申上る其節御上陸場には陸軍兵士一小隊斗陳列して捧銃の禮を爲せり夫を當時成造中のドック御一覽再御乗船にて港内なる番船の前を御通行御往復とも二十一新港御一覽其節意太里國と御乗船の軍艦船將ウエツク罷出て御挨拶申上る第四時半御歸館此日石見守御雇兩人シーボルト御供申上る

夜七時半夜餐夜餐は昨日と同しく盛會なり御陪從之者御接待之者都合男女三十人程なりし

十月十三日晴 金

十一月八日

朝當地御安著之儀及來月曜日當地御出帆之儀等電信を以巴里へ申遣き當地鎮台及妻子に被下物之取調ひぬき

此日本國に在勤せる本地の成兵を集め調兵御覽み入るとして石見守以下一同御供鎮台及附屬之士官御案内申上公子は御馬にて俊太郎シーボルト御供石見守以下馬車ニ乗罷越き鎮台始御案内之者拾人斗騎馬ニ乗御附添馬車乗組之者は其後不隨ひ官邸の前を左に市街を御行過ニ城門を御通抜四五丁ニ至調兵場不至る調兵場は此日調練の兵隊各其頭ニ指合し戦隊に整頓して御着の節は樂手賀樂を奏せり調兵場の中央不片寄て大隊旗を建ふる處へ御越夫を鎮台始不殘御供不前ニ整頓しふる陳列の前を御一周御一周之節兵隊は棒銃を爲し樂手は奏樂せりニ元の大隊旗の本不御戻り馬を駐免て運動御一覽其時一齊の横隊忽ち縦隊不轉して行軍の式をなせり最頭の隊は黒き戎衣ニ乗小隊の行進十一隊次不赤き戎衣ニ乗小隊二隊其次不同糞ニ乗小隊三拾七隊なり各小隊四十人外に樂手隊士坑兵雜兵士官迄ニ都合四千人程といふ行軍之法調兵場の中

中央に横一文字不並立せし兵隊を左之方の首を小隊に作て徐步環旋して大隊旗の本ニ乗御覽ふる公子の前を行過て元整頓しふる處不至る其行進兩度不して初度の行進不は毎小隊公子の前に至る士官は其手に持し劍を笠行過てこれを收免隊に添ふて行進せり其步躐徐々として寸分の齟齬なく恰も器械もて環旋する如し再度の行進は急步なりし其規矩は更に靜肅なり各隊ともに再度行進し終て初整頓しふる如く横一文字に並立せし免其中央に在る小隊七八隊列を超て進むこと貳拾歩計不して笠銃の舉動をなせり其時公子及御附添のもの少しく進んで其隊の前面に至る其兵隊は公子の其前面に至るとひとしく銃槍の手前を爲せり手前濟て公子は又元の地位に御戻り其時一列の兵隊首尾を旋回して退陣せり公子及御陪從之騎馬御供は其退陣の中央不在りて前後の兵隊ニ乗護衛し緩歩ニ乗官邸の前不至り各隊分離して式終る此日公子は陣羽織御直衣ニ乗馬上尤美麗なりし御案内せし鎮台其外も總赤き裝束にて陣中御一行の節は尤雄壯なりし第五時過御歸館第七時半夜餐昨夜と同しく貴官の妻娘罷出る御陪宴の者殆三十人余なりし

十月十四日晴 土

四百五十二
十一月九日

朝十一時半鎮台及附屬士官御案内石見守凌雲御扈從四人シーボルト御供馬車ニ本地の砲臺御越大砲の打御一覽夫々海岸に連築せし砲臺御巡覽第一時御歸館

第三時再馬車ニ官邸を一里餘隔りある海岸の曠野ニ小銃的打御覽鎮台及附屬士官御案内御附添之者一同御供市街を行過海岸の峯路を曲折し進築せし兵卒の屯所に至る其屯所の前道途高低屈曲せし處一中隊余の兵卒を路の左右に列ねし免御通行の節捧銃の禮をなせり屯所の前には樂手隊奏樂せり夫々の打場御越御一覽六尺斗の水に際せし處に巾二間余高掛置三百歩の距離にてこれを發す兵卒は二十人一隊ニ二列に組て發銃せり銃はシナイフルといふ尤輕便の銃なり此日公子にも御試銃ありしが射誤さきりしかば一同相感しぬ的打場兩所ニ其一は距離稍遠く七百歩もあるを射的は方にして六尺余と見ゆ此日風強けをば遠的の分は其的を射ること少なかりし第五時御歸館此夜は本地在留の士官及各國在留公使總公公子に謁せし免んとて夜

會を催し第八時よ官邸中の集議場御越在留士官の夫妻及各國公使等一同罷出て御目見申上る謁見の式は御着の節と同じく公子は段の上に御着坐階下に出て拜謁す謁終て公子は段を下り雜沓の稠衆中ニ種々御雜話兼相設りし別席ニ御茶或は氷製の菓子及種々之果物肉類杯被召上夜十時頃散宴此夜相集りし人數凡二百人余御陪從は石見守俊太郎凌雲萬太夫シーボルト等なりし

十月十五日晴 日

十一月十日

晝後第三時鎮台御案内ニ本港に碇泊せるカレドニヤリと云ふ惣鐵船御一覽石見守凌雲御雇の者兩人シーボルト御供第四字御歸館俊太郎篤太夫は本地のコロネル誘引ニ砲臺及新製の大砲等一覽新製の大砲拾六門目玉千參百キロカ夫々小舟ニ公子の御越りし惣鐵船ニ相越して一覽惣鐵船ラムといふの長九十メートル巾二十メートル蒸氣器械千馬力大砲貳拾四門乘組六百五十人尤牢壯なり其法度靜蕭と見へて船中諸器械の布置兵卒の舉動等頗る行届けり外面の鐵二重張重て其厚サ四分五分餘といふ夜七時半

夜餐 毎度諸士官夫妻共御接待申上
御同案凡三十人餘なすし

十月十六日晴 月

十一月十一日

此日當港御發程ニ付朝方御理糶九時半御餐相濟鎮台其外被下物等相濟第
 十一時御着之節御上陸ありし處をバツテイラ御乗組過日御迎申上し軍艦
 エンテジイヨン御乗組官邸御發の節鎮台は其門前迄御送申上其男及士官一人御乗組
 隊を出し御護衛をなし騎馬の兵四騎御車の前を拂へ晝十一時五十分御出帆順風ニ
 あり舟行疾し御乗組の軍艦に並ひ碇泊せる惣鐵船昨日御覽のた免御越之と
 ころ日曜日ニお祝砲の式なしるゝく此日其式をなすとして満船に種々の國
 旗を建水夫を橋桁に登せ御乗組の軍艦其鐵船に際して港口より出んとする
 頃二十一發の祝砲を發せり順風なれとも港口は波濤つよく船頗る動搖せ
 り午後洋中に航行して追々波浪穩るに舟中安然たり夜十二時頃忽然とし
 て閩船を喝動せる響聲あり時に船穩るふて公子もいまゝ寢に附給はま一
 同も御側に侍せば何事やらんと船將に問へしふこは本船の機關破摧せし

ふていまゝ其破損明了ならされとも所詮爾後その機關を用ゆること無覺
 束されは再ひマルタ島御歸船機關修復の上御航海あるるき歟又は他船も
 て御送可申上哉然るに本夜は順風なれば御歸船あらんふは風逆をれば器
 械なき船ふて何時マルタ御歸着も難測可相成は順風に帆を揚帆前もて航
 行期を延して馬塞里に御着あらんことを希ふ旨船將を申上げはさらハ
 本船にて御越るるるき旨御答相成しふ船將も大に悦ひゝり此夜は機關損
 しむとも風順なきは帆前ふて一時八九里程を航行せといふ

十月十七日晴 火

十一月十二日

順風なきとも風輕けきは舟行緩に夜ふ入ては風全く死し船洋中に濺遊せ
 りされと波濤靜なきは舟中殊ニ穩るなり

十月十八日晴 水

十一月十三日

朝來美晴輕風なれとも順なきは舟行稍速なり一時五六里程を行きといふ
 十時頃破損せし器械の僅に修繕せしとして試のた免機關もて暫時航せしが

風順なまは手薄き器械は他日の具ふとて帆前に舳行を夜に入し風止たれは再未成の器械ふて舳行せしる大破せし機關の修繕全あらまと見へて再損したり

此日御慰ふとて海中に浮的を流して御試砲有之

十月十九日晴晚曇 木

十一月十四日

朝十時サルジン島を認む夕方より北風強く間切なまとも舟行速るな夜御慰ふ水夫の曲藝をなさしむ

十月廿日曇 金

十一月十五日

朝第九時水師訓練を御覽に入る午後とて風強く船追々動揺せり夜ふ入て風いよく強く船の半面ふ吹當り怒濤如屋船の動揺尤甚し殊に機關なけまは片帆間切帆を揚し舳行尤危るし夜半頃機關の損せし處とて潮突入して船底に満しこと一尺八寸程なりし水夫集りて漸汲盡し僅に其破口を繕ひ得るといふ終夜勁風暴雨ふて昏黒咫尺を辨せず其上機關なき

船なまは地方に添て舳行まれば暗礁危巖の恐るるとて夜半とて揖を轉して南洋に舳行し夜明て後再其濤路を得るるといふ

十月廿一日曇 土

十一月十六日

昨夜とて風烈しく雨を交る船の動揺甚しく朝來風尙歇されは一同海疾ふて朝餐に附きし人も稀なりされとも公子には御疲もなく御歩行るし昨夜半々再び破損せし器械の又修繕せしと見へて僅に舳行を助けしが半成の機關なれば舟行隨意ならさし午後とて鬱蒸の氣般雷となり黒雲深く四顧晦冥ふて濤路を認むること能はず再び洋中ふ揖を回らせし幸に洋中ふ一の孤島を認め得るるとて航せしが其孤島則馬寨里の海岸ふて第一時頃辛ふして港口ふ達す其時雨歇雨霧纒ふ散して四望漸分明なり昨夜の勁風怒濤に舳行困せしより船將及其士官とも苦心殊に甚しく利乗組中馬寨里港の津口詳知之者なく船地方に添ふこと能はず風烈しけまハ船を洋中に出して濤はせ危巖暗礁を避まとも何まの日達津の定めなく怒浪に展轉せは終には成行如何やら人と一同心を痛めしに此に至り初濤路を得船將は更なり乗組之者一同安逸之想なし怡悦の色を顯はせ

第二時半港内御着船本船の機關隨意ならさばは川蒸氣を雇へこれを曳
せて港内入る第四時本地鎮台に御着港之旨書翰を以申遣し明廿二日第
十一時半御上陸之旨申達を御着後船將ウエツクに御航海中種々骨折し御
挨拶として脇差一本を御國全圖を添て被下第五時本地鎮台を甲必丹を
以御安着を祝し明日御上着之節馬車を以御迎之旨申上る夜暴風驟雨碇泊
之群船相輾りて或は橋を折り又は橋桁を吹落し終夜響聲止まき本船の碇
泊せし側を意太里船の投錨し或る暴風を漾わされ本船に輾りてパツ
タイラ貳艘を摧破を又錨繩の相互に纏轉して曉に至り漸くこれを解ふり
といふ 夕四時篤太夫シーボルト上陸御旅宿を調ふ明日御上陸の手筈今
日御着港之儀電信ニを巴里に申遣す

十月廿二日晴 日

十一月十七日

第十一時半本船のパツタイラニを御上陸御上陸之節は船糺を爲し最高の
橋を御紋附の御旗を建水夫を帆桁に登らせ別に一隊の兵卒は捧銃の禮を

爲して御上陸を祝す祝砲も打砲の手筈なりしる港内狭くして舟船相接し
ふまは其式はなし馬塞里港運上所の前ニを御上陸兼を鎮台より差出しふ
る美麗の馬車御乗組ガランドオラルウブルドバエーといふ客舎御投
館御着後鎮台の書記官罷出て御機嫌を伺ふ第三時半馬車ニを市街御遊覽
ブラドウといふいと佳麗なる花園を御行過海岸に夕陽の晩景御眺望
時に宿雨新晴ニを秋花艶を増し處々噴水相映し霜を帶る葉は夕陽と紅を
争ひ遠く望めは海天渺邈として風漸烈ならさばとも連日怒激せし波濤は
奔馬の如く夕陽を掀る遠近の波塘ふは怒浪岸を捲きしと見えて様々の海
草杯打揚る風情昨日心を苦しめしは今日目を怡はしむるなるをしと坐
ろに雅興を添ふと覺ふマルタ島御出發以後舟中に枕籍し鯨濤鱗霧多少の
苦を免を茲に此美景を得るは血海九地を脱し白蓮普陀の場に入望し心地
して公子を始奉り一同も快を盡せり此夜御安着御祝として船將ウエツク
始士官拾三人に御同案を夜餐被下石見守以下一同御相伴にふま

十月廿三日晴 月

十一月十八日

朝十時甲必丹ウエツク其妻本地に滞在せしとて罷出る被下物有之第十一時馬車ニ乘本地汽馬場御越十一時半發軔之汽車御乘組夜七時半リヨン御着ニ乘小夜食瀛車中御徹夜翌曉七時巴里御歸着同所會所迄向山隼人正始在留之者御出迎朝七時半御歸館

十月廿四日晴 火

十一月十九日

第十一時半御歸館御祝として向山隼人正始御迎之者御供之者共御同案之午餐被下御附添コロチル教師共罷出る第一時御安着御祝としてフロリヘラルト罷出御機嫌を伺ふ

十月廿五日晴 水

十一月十九日

御土産御殘置之分取調之た先石見守篤太夫外國方旅宿に罷越第三時ビエツトシヨウモンといふ花園御遊覽夕五時御歸館コロチル高松凌雲御雇兩人御供

夜五時半此度到着せし留學生徒八人御目見被仰出夜餐被下取締栗本貞次郎召連罷出る

昨夜江戸表に御送相成し御服類到着今朝開緘御品取調分以ふ

十月廿六日晴 木

十一月廿一日

巴里在留之英國公使交代に付新任之者に名札差出に御旅館御入費凡積篤太夫にコンマンタントに申談に

十月廿七日晴 金

十一月廿二日

朝十時隼人正石見守英國公使館に罷越同國御越之儀引合意太里公使館に罷越御巡國中彼是取扱ふにし挨拶申入る

十月廿八日曇 土

十一月廿三日

午後御旅館御入用之儀に付日比野清作罷出る夜石見守篤太夫外國局旅宿罷越に御巡國御入費御旅館御入用迄及是迄御遣拂之仕分方申談に

十月廿九日晴 日

十一月廿四日

英國御越之儀來十一月五日則土曜日巴里御發と御治定相成
御附添之者一同御手當類來十二月分迄内借相濟

十月卅日曇 月

十一月廿五日

俊太郎篤太夫御買上ニ付罷越之馬車壹輛十一月限ニ御斷之積篤太夫
ノコンマンタントヲ申達之

十一月朔曇 火

十一月廿六日

御國行御用狀差立る京都行江戸行とも封入

御直書封入差出之英國御供御旅館御留守之者共石見守ノ口達申渡之

十一月二日曇 水

十一月廿七日

篤太夫外國局鹽島淺吉御旅館御置附以後御贈品不可相成御品改突合せ調
分ニ由之

御旅館御入費凡積コンマタントノ差出候不付翻譯之上御入用積由之

江戸表ノ御取寄品京都ノ御持越之品調分由之

十一月三日 木

十一月廿八日

高松凌雲英國御用濟之上は願之通外宿可致旨石見守ノ申達之同人是迄罷
在候部屋山内文次郎引移之積申達之

英國御越明後五日と御治定尤カレイノ同國軍艦ニ御迎申上御滯留中は

御旅館其外毎事英政府おゐて御取扱申上る旨ミニストルノ申上る篤太夫

東洋バンクノ罷越佛貨英貨に爲替由之御入用之儀不付日比野清作御旅

館ノ罷出る馬車御減不付ワレイデビイ御減之儀篤太夫ノコンマンタント

申談之

御留守中右夫婦之者御暇之積申談置

十一月四日曇 金

十一月廿九日

山内文次郎御旅館爲引移不付是迄御夫罷在候部屋取繕ヒ篤太夫引移リ篤
太夫跡木村宗三宗三跡ノ文次郎引越之積篤太夫ノコンマンタントノ申談之
英國行之儀五日御出立之積之處其六日日曜日ハ先方御着御不都合可有

之ヲ付六日巴里御發之旨英公使館ニ申遣ニ同國留學生之者へも電信ニ其段申遣ニ

十一月五日曇 土

十一月卅日

御出發御理裝 記事なし

十一月六日曇 日

十二月一日

朝十一時半御旅館御發し尤御陪從之者御見立之者其半時前相發しカール
デノヲルとゞ瀛車御乗組夕七時十分カレイ港御着

英國御巡行日誌

◎自筆草稿一本表紙ニ上
記ノ文字アリ今追書ス

慶應三年丁卯十一月六日晴 日

十二月一日

此日英國御越之積兼て御手筈相成ぬをは第十一時半御旅館を御發し馬車
ニカールジュノヲルといふ瀛車場御越十二時發軔之瀛車御乗組御陪從
之者御

見立之者共多人數なまはとて十一時方御先ニ瀛車場罷越ヌフロ
リヘラルト、シベリヨン、カシヨン、御附添コロチル等御見立申上る

公子英國御越之儀は佛國博覽會之舉被爲濟候上は各國御巡行之御手初ニ
可被成御手筈之とて當時同國之女王外出之旨巴里在留公使ニ被申越且
同國のた免他邦御巡行ニ御不都合有之候ニ夫女王も不本意之至ニ付便
宜次第可申越旨をも申立候としるは茲ニ其期よろしく御招請申上度女王
ニ被申越をし旨在留公子ニ申立則此日御出發と相成

英國御巡行御附添人數名面

向山隼人正

山高石見守

- 保科俊太郎
- 三田伊右衛門
- 高松凌雲
- 箕作貞一郎
- 澁澤篤太夫
- 菊池平八郎
- 井坂泉太郎
- 加治權三郎
- 三輪端藏
- シーボルト
- 華人正從者壹人
- 石見守從者壹人
- 小遣 綱吉
- アンリイ

都合一行拾七人となりぬ

此日は空曇り風寒く汽車中も寂寥なり地勢追々北移しぬ是は夜に入ては寒威甚し夜六時半ブロンギユといふ佛國北邊の海に接せし地御着平常の旅人は

此地方船を雇ひ英都倫敦府の大橋迄航まといふ

夜七時十分カレイ御着オテルデデッサンといふ客舎御投館折節英國に在留せるコンシユール罷出御機嫌を伺ふ明日御航海之手續及蒸氣船用意に多し有之旨申上る

十一月七日曇午後雪寒甚 月

十二月二日

朝英國を罷越しぬるメジヨールエトワル罷出る昨日を以て風強く殊に逆風なをば御航海無覺束旨申上る十一時頃風少しく静なるとて再御出帆之儀申立十二時午飯相濟馬車に客舎を御發し北邊の港口に御乗組御船は英政府の差出せし飛脚船に巨大ならさとも堅牢にて怒濤激浪に航する船なりといふ

御乗船直に御出帆のところ風尙烈しく港口を以て白浪空を掀ゆるはあり

て剩煙霧朦朧として四望辨せず逆浪の激せし時は船中天子騰奔し九地ふ
 没入するを覺ゆこの舳行は暫時なまとも船の動搖はけしきこと兼り聽傳
 へるるぬきは公子を奉始一同船室に潛居せしが船洋中に出し頃は海疾ふ
 苦さる人は十ふ一二なりしきとも公子は御厭もなく折々甲板上ニ御
 歩行或は洋中難破せし船を望みと船將申上をいふはし御覽杯被成し終
 には少しく御船氣ニあ一同とひとしく御寝みつるをし第二時頃を風雪つ
 よく甲板は逆浪の打上けし潮と積雪とみて物まこき風情なましと覺し
 る見し人は稀なり此日同しく航海せし飛脚船多く難破して困苦せしといふ御航海中
 二艘程難船ありしといつても橋折を掛掛け乗組の有無は辨れども
 標なる有

第三時英國ドブル港御着此日此着は平常投錨の場處に着岸な
 いうふいと狹隘なる港
 口と望御上陸御迎之馬車來り居るを御乗組直り市中の入口なる客舎に
 て暫時御休息御上陸場迄本地ゼテラール市中鎮台及コロネル杯罷出御出
 迎客舎に御案内申上御茶カツフヘー杯被召上上陸後は海疾稍愈ゆまとも最前
 の苦惱烈しけまは全數と寒威と

にて快然の人は稀なり

此日客舎の入口なる廣間にてゼテラール鎮台其外共公子御渡英の辱きを
 謝し其平寧を祝する禮式をなま一同禮服ニ罷出廣間の正面に公子を請
 して左の祝詞を呈す

日本公子ヒスロヤルハイテス

民部大輔殿下に申す

ドブル港及ドブル府に支配人并紳士等謹
 ヌウルロヤルハイテス英吉利の地に上陸し給ふたるを祝賀
 ヌウルロヤルハイテスの貴國漸歐洲各國の形勢を了解し且交を厚ふせん
 と欲する不付此度盛大なる日本君主の親弟我國に來臨し給ふは我等於も
 總る我國人の爲にも大に喜悅する處なり又ユウルロヤルハイテスの我國
 を尋問し給ふは我貴きクインと東方の盛大なる君主との交際を厚ふし
 兩國之貿易利益を生し且開化世中弘まるるを確證といふるし我等

ユウルロヤルハイチスの幸福を祈り此府中の人々ユウルロヤルハイチス
及貴家を尊敬するの意を表す

千八百六十七年第十二月二日

ドブル府町寄合の印を證として申す

支配人

ゼジチアーチワード手記

書記官

エドワルド、ノツクル手記

右祝詞を呈する節は支配人頭の側子侍者禮式を用ゆる具數品を捧げより
英國御滞在中御附添を命せらるしメシヨールエドワルドも罷出て祝詞を呈
せ御着岸の節は二十一發の祝砲あり禮式終て第四時客舎御發し汽車場と
て國王を出せる汽車御乗組夜六時倫敦府御着此日の汽車は別に公子の爲に設
乗組の節道の兩縁に一中隊の歩兵相
列し捧銃の禮を爲し樂手奏樂せり倫敦の汽車場には爲御迎禮車數輛を出して

御案内申上る御國留學生川路太郎中村敬輔其他生徒一同御出迎申上る夜

六時半ブルツタストロイト英國政府ニ相設置し客舎御投館兼多國王が
御招請之積

ニ多客舎は政府が相設け御滞在中御附添之者申上る且御雇士
官シールボルト儀元英國に附屬之士官なまは御滞在中は同國が御附添申付旨申聞る

十一月八日曇 火

十二月三日

本地は地位北移しぬきは秋後とて寒氣強く殊に連日霧深く快晴の日なし
朝とて霧深く咫尺辨せず寒威も尤凜烈なり第十一時外國事務書記官ハモ
ンド罷出て御機嫌を伺ふ第二時第一等外國事務執政ロードスタンレン罷
出御安着を祝し明八日國王御逢之旨申立る尤御懇親之御逢ニ付御平服ニ
て御越相願度且御陪從人數御減し有之度國王は當時倫敦都外なるウエン
トリールの別宮に在之旨其外手續申上罷歸る

夜川路太郎中村敬輔ロエード罷出る夜七時御附添メジョールエドワルド御
案内本地の議政堂御越隼人正石見守俊太郎凌雲篤太夫御附兩人御供川路
太郎も同様御供被仰付議政堂はタイムスの川に瀕して廣大なる堂宇なり

議事場二ヶ處ニ分き其一は貴戚の向其一は諸民の決議せる處ニ恒例議事は夜ふ入て開くといふ御越之節は議事最中なまし同所頭取之者罷出て諸方御案内申上る

十一月九日曇 水

十二月四日

此日國王御逢之積ニ付午後御支度外國事務執政ロードスタンレン及メジヨールエドワル御案内隼人正石見守俊太郎伊右衛門御雇兩人シーボルト御供第二時客車御發し本地の瀛車場を瀛車御乗組第三時別宮御着瀛車場は禮車御乗組夫を御逢之式有之此日之式は別に記載御逢濟夜六時御歸館夜八時御招待ニ付本地の劇場御越隼人正石見守俊太郎伊右衛門凌雲御雇兩人御供夜十一時御歸館箕作貞一郎澁澤篤太夫本地バンク罷越御用意金爲替請取川路太郎同道にまを

第一等ミニストルロードテルジイ第二等エジヨト罷出て御機嫌を伺ふ
十一月十日曇 木
十二月五日

此日調兵御覽入る旨昨日御附添之者申上しる天氣極しく調兵なしるま
しとて第十一時をタイムスといふ巨大なる新聞紙局に御案内申上る隼人
正石見守俊太郎貞一郎篤太夫御雇兩人御供にまを本地の新聞局は歐州に有名なる巨大の局なり其刮字板摺出し之製作尤精功簡易なり一日四十人の工人ニ多二時間十四萬枚余の紙數を摺出し毎日諸方に需く其器械頗る緻密ニ多精妙を盡せり

第十二時御歸館午餐後第一時半頃を本地武器貯所御越隼人正石見守俊
太郎伊右衛門凌雲貞一郎篤太夫御雇兩人御供古代の武器刀槍銃砲逐一御
歴覽其餘種々奇古物御覽相成御覽の銃一箇の貯所に七萬挺を藏置といふ其外古代の珍品夥しく陳羅せり別に騎馬武者の形なりといふ

御歸路鐵砲師御立寄新製之銃御一覽刀劍鍛鍊の仕方御覽五時半御歸館夜
川路太郎罷出る此日國王太子及妃其外に御送品取調目錄相添御附添士官
に引渡を大君御寫眞公子御寫眞各一枚を并て國王に御贈相成
十一月十一日曇細雨 金
十二月六日

此日は倫敦郊外之ウーリツヂといふ地ニ大砲製造器械及製作の仕方砲
御巡國日録
四百七十三

兵の訓練を御覽に入るとて朝十時とて御發し御附添エトワル御案内隼人正石見守俊太郎伊右衛門貞一郎篤太夫御雇兩人シーボルト御供チエーリングクロスといふ瀛車場ニる瀛車御乗組タイムスといふ都府を中裁せる洪河の橋上を瀛車ニる御渡十一時頃ウーリツチ御着本地の瀛車場御着之節一中隊余の歩兵半面正列して捧銃の禮を爲せり爲御出迎同所セテラール兩人及附屬士官數多罷出馬車御乗組ニる屯所の前ニ至るセテラール其案内申上る外に騎兵二隊御車の前後方御警衛中上る諸方御巡覽之節も同様御警衛申上る屯所の前ニは黒き戎服の兵隊一中隊赤き戎衣之歩兵隊一中隊斗一列ニ並立して捧銃の禮をなし士官は手ニ持し劍を笠て敬禮を爲せり屯所の前を御通過ニる調兵場御越のところ調兵場ニは組々の砲兵各處ニ陣列して調兵の用意せり調兵場の前を御一周ニる其傍ニ設置ぬる一の巨大なるテントのことく作てゑる陣屋ニ御入て貯蓄し置る大砲車臺彈丸軍艦砲臺築造之具浮橋假橋其外種々攻守ニ用ゆる武器舊來之古典とて新發明之品迄精密ニ模造しゑる雛形を御巡覽再ひ調

兵場御越ニる本日のゼテラールウードの宰せる大隊旗之本ニる運動御

一覽此日の砲兵は騎砲兵とて大砲ニ騎兵を并せゑる隊二座野戰砲每座六門一門の砲に騎兵

七騎を添ふ外に大砲の駕せる馬六疋を聯駕し其駕せし馬に砲兵三人を乗ゑり七騎の騎兵は大砲の前に並立せり砲の跡は彈藥車壹輛に四馬を駕し二人の砲兵駕せし馬に乗りゑり攻撃之節は前の騎兵は駈進し忽ち馬より下りて發砲し又馬に乗り引退く騎兵砲門彈藥車とも總一齊に驅馳し其進退座作の駿速なる舉動の簡易靜肅なる人の四足を使ふことし

其次ニ砲兵一座砲門六其次は稍大なる砲四門ニて二座なると公子の大隊旗の

本ニ御着ゑるとひとしく各隊ニ指令し笠隊ニ作て行軍の式を爲せり其行軍大隊旗の前ニ至ると士官各劍を笠て禮を爲し環旋して三度に及る初度は徐歩次は少し疾く終は急歩なりいつまも行軍三次ニして前ニ列せる騎砲兵規矩正肅にて馬首車輪の位地寸分の齟齬なし

二座は調兵場ニ止り其餘は徐歩して陣營ニ退けり其止まると二座の騎砲兵は各隊ニ分離して發砲の舉動をなせり其舉動迅速にして規矩正しく馬車運用の坐作頗る精妙を究ゑり發

砲凡半時間種々攻撃の舉動をなし其技終て陣營ニ退けり夫々屯所御越ニる兵隊士官を教育せる學校築造地理精舍算量其外諸學科及休日之を先遊見所を設置器械を備置て遊戯ニ用ゆる細工物の製作所兵隊ニる催せる劇

場杯逐一御歴覽屯所の側なる食盤の間子御越御晝食此食盤場は調兵の節セラール始貴官之向食事る爲なりといふ此日御案内 午飯前屯所之前ニ有太子之弟御逢有之太子之弟は十之者御供之者一同御同案 午飯後一同御案内 申上大砲製造所御越卷鐵の巨砲製造之法及彈丸鑄立小銃の鉛丸製方其外大砲子用ゆる器械製作逐一御歴覽夫大砲車臺を製する場所御一覽車臺は檜楓の如き材に器械に仕掛し鋸もてこれを挽裂く其易きこと鉄に紙布を裁することし頃刻にして數十の車輪及其他の具を製し出さ御一覽後再び大砲彈丸の製造所御越破裂丸及實丸ニ有鐵船を破摧する彈舊砲の巨丸様様新發明之精製御覽第四時半頃御覽濟馬車御乗組ニ有汽車場御越夕五時過御歸館

先に瀛車場御着の節二十一發の祝砲を發せしか其期早く御聽取なしとて御晝食濟の節再二十一發の祝砲を爲せり御案内の者は終日騎馬にて諸方駈廻り御供せり 夜五時半御國留學生世話役ロエート御招請申上ニ付隼人正石見守俊太郎伊右衛門御雇兩人御供ニ有御越留學生取締川路太郎中村敬輔も罷出御嬰應申上夜影畫之技御覽子入る九時過御歸館夜九時半過へールマセスチー

スヤートルといふ劇場を燒失二時間斗ニ有鎮火

十一月十二日曇微雪 土

十二月七日

朝十時半々典籍貯所御一覽石見守御雇兩人シーボルト御供十一時半御歸館第二時外國事務執政御訊問隼人正石見守三田伊右衛門御雇兩人御供シーボルトエトワル御案内國事執政御訊海軍會議所御立寄第三時半御歸館第三時頃巴里を御用狀來る御國御用狀封入有之上様公子の御直書封入有之室賀伊豫守を石見守の御用狀差越夜十時博覽會御用向ニ付外國方鹽島淺吉商人卯三郎召連罷越

十一月十三日雪 日

十二月八日

第一時キリストルバレイスといふ硝器ニ有作立ある巨屋御覽に入るとてエドワル御案内石見守俊太郎凌雲御雇兩人シーボルト御供子御越キトルバレイスは都府郊外ニ有先年本地に有催せし博物會の跡なりし其後種々修飾して土民の遊覽場になし置ぬ其棟屋は鐵の柱にて屋根は硝器にて葺立其中に各國古代の宮殿の模様其他奇古の品を陳羅したり入口はいと長き階廊にて處々に曲折してこれを登る品物展觀の場は廣き板間にて其側に巨大なる集樂場あり音頭の者の座を中央に設け其前後左

右大なる磴道のこくとく向高に机席を設けり庭前には五千人を集め一時に奏樂をといふ其
廣き板間の正面は階子ニ多これを下りて庭前に出る其庭は遊歩の爲に設けある苑園にし
て奇草佳木を植並へ處處に噴水あり遊見する人の爲には各處に机床を備へあり苑園廣大
にして高低あり曲折あり或は危巖に添ふて泉を溜き流に隨て石橋を架せり尤壯麗を盡せ
り其庭前を下りて園林を繞り一の池上に至る其池の中央に突兀せし危 御一覽濟第四
時半御歸館

十一月十四日曇 月

十二月九日

此日スリウスベクーテスといふ地ニ大砲の遠打御覽ふ入るとて御附添
のエドワル御案内隼人正以下一同御供朝九時半御發馬車ニ本地の瀛車
場御越瀛車御乗組第十一時半同所御着 御着の節砲岸にて二十 砲兵の屯集せ
る陣營ニ御案内築城臺場等の地圖御一覽夫々大砲貯所にて發砲の手前及
車臺の損せし時取繕ひの訓練御一覽 此手前は士官と兵卒と打交せて其士官はコ
加はり運動手前を爲まといふ 御一覽後屯所中の食盤場ニる午餐 御陪從の者御案
御同案ニ 夫々海岸ニ御越ハ英里法八里程引潮すといふ 大砲の打方御一覽方海岸に
多午餐 掛並るる六十斤程の筒に破裂丸を込めて發砲せり海中に在りて鐵と石にて遠近各
處に設置滿潮には潮に隠まはとて乾潮を期して試砲を近きは貳百間餘遠きは英里法二里

(御國の三十丁其貌方にして箱のこどく尤堅牢なりといふ此日遠近とも六箇の的に發砲せ
しがいつまも其的に至まり又火矢を發する技を御覽に入る火矢は長き椎の實彈のこどく
にて望遠鏡臺の如き臺を立其上に長貳間斗なる鐵筒の半切せしを備置火矢
を載て火を注す其火勢猛烈にして迅速なり敵陣を焚討する時の具といふ

御一覽後別ニ一箇の試砲場御越種々の大砲御覽彈玉貯所ニ是迄相用へ
し彈丸種々を見本ふるとて備置きしを御覽再び海岸ニ御越三百斤の大

砲ニ試發御一覽 此彈は刃鐵ニ多敵船を突裂の用なり其的貳十丁餘なりしか打砲せし
る鐵船を突 御一覽後同所設置る鐵臺場之雛形及試のゑ鉄板打抜る
を逐一御歴覽 鐵臺場は唯一箇の雛形なりし其内面は石ニ多築立凡三尺厚程なり内外

度にて厚七八寸の鐵板に壹尺斗の樫木を疊みこれを鐵板の請とし其樫木は太き鐵張を幾
度も索重ねたるにて引通し附あるものなり其砲は六十斤程ニ多十丁斗の距離ニ多刃鐵
彈もて試しに御らんせしか其鐵板を貫きしこと恰も網羅の如く内面の材は總多摧破して
全材を見其外ニ四寸六寸位の鐵板を貫きしこと恰も網羅の如く内面の材は總多摧破して
しより右の試を爲せし後別ニ發明して製せし鐵板一枚僅に貫くこと能はまといふ 第三時
本國所領のマルタ島は此度精鐵の砲臺を製するに其鍊鐵の法を用ゆるしといふ 第三時
御一覽濟馬車ニる瀛車場御越直ニ發朝夕五時半御歸館 此日同所御着の節在動
申上る砲兵屯所ニ多は短銃を
持し歩兵捧銃の禮を爲せり

十一月十五日曇 火

十二月十日

朝十時半本國政府ニ立置ゑるバンク御覽入るとして御附添之エトワル御案内石見守俊太郎伊右衛門篤太夫御雇兩人シーボルト御供金銀貨幣掛改之場及貯所地金積置所紙幣製作所逐一御歴覽夫々金銀銅の貨幣を製する場所御越ニ御一覽此日は金銀の製作なく唯銅のみ製するを見る其製造の法頗る簡易輕便ふて然嚴肅なり兩替所の廣大にて金銀の貯蓄せしことなる形状これニ亦も其國の富庶を推斗るべく思は第一時半御覽濟御歸館

此日隼人正伊右衛門シーボルト同道外國事務執政の役所に罷越御國議ニ付引合有之第三時半歸館

十一月十六日晴 水

十二月十一日

此日ボルツムウスといふ地ニ軍艦貯所其外海軍器械を御覽ニ入るとして御附添エドワル御案内石見守俊太郎凌雲貞一郎篤太夫御雇四人シーボルト御供朝十一時御旅宿を發し本地の汽車場ニ乗車御乗組第一時四十分ボルツムウス御着夫々御迎馬車御乗替ホテルビートルといふ客舎御投

宿 此日汽車場御着并客舎御着之節とも海岸ニ二十一發宛の祝砲を發せり汽車場には赤く裝へし歩兵一中隊を出し士官は禮服ニ着替劍を笠て禮を爲せり兵卒は捧銃の禮を爲せり馬車御通行之節は樂手隊奏樂し御車の後には赤き戎衣の騎兵二騎從へり本地在勤之アドミラルアルセチラーレル其他數員之士官いづれも美しき禮服ニ着罷出御案内申上て客舎御越客舎の前には二箇の歩兵勤番所 第二時客舎ニ御晝食御一覽は明日とて此日は客舎ニ御休息

隼人正伊右衛門は引合筋有之ニ付御陪從なし此日は雲霧稍晴て時々日光を見るを得る倫敦都御着以來連日の曇天剩へ煙雲多く四望分明ならぬ殆鬱陶を覺へし此地は海に接し氣候も稍暖るに其時薄暮なりしる海天時暉夕陽の雲間に映る光景頗る快然なり客舎は海岸に添ふる廣き草園中在りて市街に雜せざるは尤靜閑にして眺望甚佳なり

十一月十七日晴 木

十二月十二日

朝十時御附添エドワル御案内石見守以下一同御供馬車ニ本地の城門内に入門内の市街御通行ニ港口に碇泊せる戦争之節士官兵卒を運送せるセラジスといふ軍艦御越ニ御一覽客舎御發之節歩兵中隊門前に列して捧銃の禮を爲し白き戎衣の樂手賀樂を奏せり御

車の後には赤き戎服の騎兵貳騎附添たり軍艦御着の節貳十一發の祝砲あり其軍艦の製尋常の飛脚船にひとしく稍大なり士官の部屋々々杯いと美麗に調へり乗組人千六百人を運輪し一時間英里法十四里を航まといふ蒸氣七百馬力あり近日當地を發しアレキサンテリヤに航すといふ

軍艦御着之節アトミラールバンズレー及附屬士官數多禮服ニ御出迎軍艦中諸部屋食盤所兵卒ノ宿所等不殘御案内御一覽後港口をバツテイラ船御乗組港内ニ碇船せる軍艦御案内其最初御越るしは近來發明ニ御製作せる元來之巨艦の航海ニ不便なるを船の中程と中裁し其蒸氣を改め精鐵ニ五箇の丸き砲門を備へ壹箇の砲門ニ貳門の巨砲四箇の砲門ニ壹門宛の巨砲を備へより其砲門の厚サ壹尺餘鐵板の内は材木の壹尺八寸程のを疊上げ發砲の節は其砲門を器械にて廻らし巨砲の口を出て釣塀のことなし置戰爭之節は船縁を釣下ヶ船水面ニ浮むこと僅數尺二艘ニ敵と狙撃爲し難くし己は敵船ニ近寄り實彈ニ敵船を摧破せといふ此軍艦の要砲臺の近港咽喉の地ニ碇船し進攻せし敵の巨艦を狙撃せといふ御一覽後再バツテイラニ別ニ碇船しある巨艦貳艘を御巡覽

せし船と艦の相接せし處に釣橋に架し各船を往來して御覽有之 其巨艦中ニ大砲點發の訓練及小銃隊の運動

御一覽又別ニ巨砲的打をなさしむ其仕方千八百ヤルトの距離ある海中ニ

白き板ニ黒き丸を點せる的を立初めは實丸ニ壹發ツ、八次次ニ四發宛

聯發ニ破裂彈を發砲せり大砲の訓練小銃の運動及的打の法尤正肅にて勁捷なり速發發せし様なと精巧至妙を究むといふるし 御越るし軍艦毎ニ中央の橋ニ御紋附ふる御旗を建御

乗組のバツテイラニ御國旗を建ふる御一覽濟御上陸市街中ニあるアド

ミラールの役所ニ御越ニ御休息御晝食御晝食の節は石見守後太郎貞一郎御屋爲御相伴アドミラール附屬士官提督の妻子綠威の午餐後同所ふる廣大のドック婦人御同案中上る午餐中其庭前ニ祝樂を奏せり

御覽夫々軍艦製造所御越軍艦ニ附屬せる鐵板蒸氣其他種々之器械製作を

逐一御覽夕四時御歸館

夜七時ゼテラールビレーの在番せる陸軍役所ニ夜餐御饗應之旨ニ御

附添エドワル御案内石見守貞一郎シーボルト御供ニ御越夜十時御歸館

十一月十八日曇 金

十二月十三日

朝七時半ボルツムウス御發流車場ニ於八時發轍之流車御乗組客舎御發の節に正列し捧銃の禮を爲し樂手奏樂せり 第十時半頃グードといふ地ニ於馬車御乗替夫ヲラルトルシヨックトといふ調兵場御着るは兼る陸軍三兵の調練を御覽御覽入るとして相設けしなきは調兵場御着之頃此日調練をへき兵隊は各所陣列し悉く戰隊御着作りて一齊並立せり 道程より爲御迎赤隊の騎兵御附添越て馬車 公子調兵場御着るとひとしく其戰隊の兵隊忽ち環旋し笠隊御着なして行軍の式をなせり最頭は騎兵の附屬せし大砲隊二座壹座砲兵四十騎尤一座 次御着撤兵一中隊八十人 歩兵九中隊八十人 其次御着騎兵拾貳小隊六小隊宛二種いづれも赤服ニ赤金色の兜を戴く次御着大砲三座壹座六門 次御着土坑兵一中隊八十人斗土坑兵は行軍の節御覽御着る前歩兵九小隊八十人 其次御着輜重一隊車拾六輛每車四馬外ニ豫備車四輛添ふて豫備車八輛を附屬せり其次御着輜重一隊車拾六輛每車四馬外ニ豫備車四輛添ふなる處に架し躋淺する具を戴せたり次御着一隊は兵糧陣營の道具攻守に用ゆる器械及病兵手負人の養生する具を備へたり 其行軍各隊笠隊御着作り

環旋し一隊一列御着て公子の御覽御着る前を徐歩其御覽る場處と兵隊の行軍御着る距離を隔て二隊の樂手隊行軍の奏樂を爲せり一隊は歩兵の樂手一隊は騎兵の樂手歩兵の行軍は步樂手御着て奏樂し騎兵の行軍は騎樂手奏樂せり徐歩御着行軍一周し終て再び環回して稍急歩御着て行軍し又環回して疾歩の行軍を爲せり 疾歩の行軍は騎兵砲兵而已ニ馬はガロといふ至極の疾歩にして列中一騎の遲速なし 行軍濟て兵隊は其部分御着て各處御着整頓其時公子は少し御車を進御着先て小高き地御着御越御着御覽夫御着砲兵の發砲を爲し發砲畢る頃後御着屯せる騎兵進撃を爲し騎兵敵陣を駈崩し引退くとひとしく歩兵進て一齊御着發銃せり夫御着攻進襲撃の舉動様々御着運轉し再び三兵を並せて三列御着なし各一齊御着戰隊を作御着初御着砲次御着騎終御着歩の順序を以總掛御着舉動各隊連發の技藝をなせり聯發終て又各隊御着分離し特角御着方陣を作御着砲銃交發の技を爲し三兵御着調練終る夫御着調練場の側御着る小川の邊御着御越し輜重兵の技藝御一覽其法先御着運行之節車御着載せし器械を試る爲御着して調練場の側御着る廣拾間斗

の小河への運輸し來る浮橋の器械を其士官指令して暫時車を下し兼
 ろ設けたる周圍六尺斗ふ長貳間餘の薄き鐵板なる浮袋を作らざる物を水
 上へ浮め其小口へ繩を附其浮袋ふ貳寸角程の細木の貳間斗なるを多く架
 し川中へ隨て浮袋の數を増し初へ架せし處へ六人の兵卒を載て水中へ突
 出し相續て前岸へ達せしむ已へ達岸して其細木の上へ厚サ壹寸五分巾八
 寸餘の板を並へ忽ち巾壹間半餘の橋梁を作せり其板を並へ終て橋の
 兩縁は細き木へ繩の附きしを以て板と細木とを結合せ動搖破摧の患なる
 らしむ其仕方輕便ふ具足せし事驚くらく感するをし橋梁成て一隊の騎兵を
 渡せしむ絶へ破壊の患なし此日試みしは川中狭けをとも其器械を増し
 れを作らそ何程廣き河巾へも容易ふ作らざるといへり其時間僅ふ半時
 程なりし御一覽終て馬車へ兵隊の屯所御一覽 此地は總て兵隊の屯所ニ
 兵共屯集して日課を以て訓練
を爲す其屯所の製二階なき長屋のことく幾陳も連築し砲兵騎兵歩兵其他の兵隊各アベ
 二其屯所の牌號を定め置恰も一市街をなせり其士官の屯せるハ稍大にして二階又は三
 階をなせり士官も兵卒も此地に住の 第二時本地セテラール之官邸ニ御休息午
 兵は妻子あれば共に住居すといふ

餐 此日はセテラール其外士官許
 多御同案にて御相伴申上る 夫々同所御發し再ひグード御越汽車御乗組直

ニ發朝夕五時倫敦御歸着

十一月十九日雨 土

十二月十四日

朝十時御發し御附添エドワル御案内石見守俊太郎伊右衛門凌雲貞一郎御
 雇之者兩人御供馬車ニ都府中の巨河タイムスと川蒸氣御乗組川口へ
 設たる鐵船製造所御越鐵艦を製する器械逐一御歴覽第二時御歸館
 澁澤篤太夫英貨引替方ニ付川路太郎同道ヲリエントタルバンク罷越午後同
 人ロエドへ御頼相成る公子御滯英中同人方御旅館可相成積ニ付諸御買上
 物に多し置候取調方ニ付罷越川路太郎中村敬輔立會之上取調に多し此
 夜右品々引分方ニ付太郎敬輔罷出調譯に多し

十一月廿日曇 日

十二月十五日

第二時ロエド罷出る昨夜調分に多し候品々引取方申談約定書面取爲替
 に多し御附添之メジョールエドワルに被下物有之

十一月廿一日曇 月

十二月十六日

朝川路太郎中村敬輔の御滞在中御取扱ありし廉を以被下物有之此夕本地御發御歸巴之積ニ付朝々御理裝夕四時御發ニ本場の汽車場ニ汽車御乗組夜七時ダブル御著御附添エドワルはダブル迄御送申上る御國生徒一同汽車場の御見立申上るダブル御着ニ節流車場の一中隊の兵卒を出し同所鎮臺其他數員之士官御迎申上る最前御休息ありし客舎御投館

十一月廿二日細雨夕晴 火

十二月十七日

朝十時半客舎御發し御送ふとて差出せし蒸氣船御乗組御附添エドワルは御乗船迄御見立ニて取引昨夜御申上し鎮臺外士官罷出御見立申上る客舎方御乗船場迄兵卒一中隊餘を散列せしめ御通行の節捧銃をなし樂手奏樂せり同所の砲臺ニて二十發の祝砲を打砲せり此日風強く雨を交る船の搖動はけしありし他日の御航海不比をば頗る易し公子はカレイ御着船迄甲板上ニ御散歩一行之者も深く海疾を患ひさる人は船室ニ潛臥せざりし第一時佛國カレイ御着直ニ御上陸同所汽車場の側なる客舎ニ御晝餐第二時汽車御乗組直ニ發朝夜七時半巴里御歸着

汽車場の爲御迎栗本安藝守同貞次郎木村宗三フロリヘルラストシベリヨ
カシヨコンコロテルジレット其他外國方支配向之者御留守之者等罷出る馬
車も手筈之を直ニ御乗組夜八時過御旅館御着
此夜御供之者御迎之者一同の御歸着御祝として御同案之夜餐被下

昭和三年一月二十日印刷
昭和三年一月廿五日發行

澁澤榮一滯佛日記全
非賣品

不許
複製

編輯者 東京府豐多摩郡杉並町大字高圓寺
四百十八番地 大塚 武松
發行者 東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會代表者 早川 純三郎
印刷者 東京市京橋區新湊町五丁目一番地
高橋 赤次郎
發行所 東京市四谷區新堀江町三番地
日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番

IF6P17

終